悪堕研究機構 悪堕ち合同4

魔法少女悪堕ち合同誌

魔法少女 悪堕ち学

ー悪堕研究機構ー

目次

『闇に負けなかった未来の先へ』
小説：ナメクジ次郎 / 絵：ふっとら　p. 4 - 12

『蒼き花は巣食われる』
小説：離宮 / 挿絵：せみいつ　p. 13 - 23

『二人の世界』
小説：星空カナタ / 挿絵：家畜　p. 24 - 33

なまはぐれ　p. 34

『片想い中の黄魔法少女を
お姉様系女幹部が
洗脳悪堕ちさせちゃう話』
小説：暮さくれ / 挿絵：だいぞう　p. 35 - 43

『魔法少女の悪堕ちに関する調査　報告書』
文責：緋風　p. 44 - 48

表紙・裏表紙イラスト：家畜
編集：緋風

闇に負けなかった未来の先へ

小説／ナメクジ次郎
挿絵／ふっとら

あの頃の私は、痛くて、辛くて、苦しくて。どうして自分だけこんな目に遭っているのだろうと、何度も自分に問いかけていた。

「痛い……痛いよぉ……」

今思えばそれは、どこにでもある普通の事で。けれどだからこそ嫌で嫌で仕方がなかった。

この世界は理不尽にできていて。いつだってどこだって悪い奴らがのさばって、正しい人がバカを見る。優しい人ばかりが、貧乏くじを引いている。

どんなに正しかった人でも、自分が傷つかない為ならば悪い人になってしまう。

だってそれは、楽な生き方だから。堕落はいとも簡単に、安全と快感を与えてくれるから。

だから今私をいじめている集団の中に、以前その標的になった子が居るのも仕方のないことなんだ。

私が耐えていれば、他の誰かが標的にされることもない。以前いじめられていた子が、また苦しい思いをすることはない。

だから耐えよう、だって私は耐えられるんだから。正しい側で居られるなら、それで十分なんだから。

「自分だけが耐えればいい。なんて間違ってるよ！　だってあなた、今こんなにも辛そうな顔してる……大丈夫！　私も一緒にどうすればいいか考えるから！　だからほら、今は私の手を取って？」

でもそんな時、私を助けてくれる人に出会った。

どこからともなく現れて、友達でもなかった自分を救ってくれた。私のヒーロー。

ああきっと、これが本当に正しいということなんだって。ただ耐えるんじゃなくて、誰かの為に行動を起こせる。

そんな優しい正しさに、私は憧れて。そして信じてみたくなったんだ。

あの子のように誰かに手を差し伸べ続けていれば、いつか世界は変わるんじゃないか――って。

1

轟音、咆哮、逃げ惑う人々。そして暴れまわる怪物。

おおよそ日常からかけ離れたものが飛び交うようになってしまった市街地で、人の流れに逆らうように私達二人は走っていた。

「――変身！」

その言葉に反応して、ネックレスに取り付けられた〝ルクスジュエル〟から眩い光が放たれる。

その光と共に身に纏うのは、戦装束。

着ていた制服は光となって消えていき、魔力によって新たな衣装が形作られる。

ふわりと風に揺れるゆったりとした青い衣装。そしてその上から装着されていくのは、その身を、人々を、隣に立つ大切な人を守る為の軽装の鎧。

体を包む光が収まれば、前へと掲げた掌に衣装と同じ青い色をした細剣が魔力によって形作られる。

目を見開いてそれを掴めば、その切っ先を目の前の怪物へ向けて構えを取る。

隣に立つ親友を見れば、彼女も変身を終えてファイティングポーズを取っている。

今の私――セイントリュンヌの姿と対になるような赤と白の配色で、ナックルガードをその手に装着した戦士、セイントソレイユ。

暴虐を振りまく眼前の存在を前にしても、私達二人は恐れも恐怖もありはしない。

「リュンヌ――頼んだよ」

「ええ、任せてソレイユ」

こちらの存在を認識した怪物が持つ、一本だけでも私の体ほどの太さを持った巨腕がこち

らへ襲い掛かって来る。
それに対して恐れることなく向かっていけば、完全に加速しきる前の拳を細剣で受け止め拮抗状態を作り出す。
何度も何度も戦った、怪物と戦う時の必勝パターン。こうなってしまえばもうこちらのものだ。

「――縛れ」
魔力を込めてそう告げれば、怪物の足元に聖なる光を放つ魔法陣が出現する。
そしてそこから鎖状に伸びた光が勢いよく巻き付き、その体を拘束した。

「今よソレイユ！」
「ナイスだよッ虎夜ちゃん！」
動きを止められた怪物に向かって、ソレイユが躍り出る。
拘束できる時間はもって数秒、けれども彼女にとってはその短い時間で十分だ。
「光よッ！」
ナックルガードに包まれたソレイユの拳が、眩い光に包まれる。
それは闇の存在たる怪物を浄化することのできる光の力、彼女の持っているそれは私とは比べ物にならないほどに大きく、強い。
「ヤアァーッ！」
元気のいいかけ声と共に振り下ろされたそれは怪物を正確に捕らえ、その浄化の力を送り込んでいく。
闇色のその体を拳が殴り抜けたと同時に、その場に光が弾けた。
そして怪物の立っていたところに残されていたのは、スーツを着た男性が一人。
その光景を見て、ソレイユの顔が、一瞬だけ曇ったことを、私は見逃さなかった。

ある日、私達の住む世界は大きく姿を変えてしまった。

負の感情に寄生し、人間をバケモノへと変えてしまう〝ヘカトンケイル〟という存在が突如として出現し、暴れ始めたのだ。

そんな中で私たちは、この変わってしまった世界を元に戻すための戦士——魔法少女として見出された。

光の力で闇を照らして、世界に希望をもたらす光の救世主。そんな存在に私——日喰虎夜と親友の藤原陽奈は選ばれた。

けど——

「どうして、こんなことになっちゃったのかな」

ヘカトンケイルとの戦いで傷つくこともあった。学校の同級生が怪物に変わってしまったことも、先生や周囲の大人の醜い部分を見せつけられることもあった。

戦わなければいけないから、事情を知らない友達とすれ違ってしまったり、私達の素質を見出しサポートしてくれた光の世界の不思議な生物が、私を庇って死んでしまったり。

色んな困難を乗り越えて。戦って、向き合って。それでもきっと、明るい未来を守れると、以前のようなちゃんとした世界を取り戻せると。そう信じて突き進んで。

そうして闇の世界の女王、この世界を変えてしまった元凶でもある〝ペルセポネ〟と名乗る存在と戦い。私達は勝利した。

それでもまだ、怪物は居なくならなかった。この世界の人間の負の感情を糧にして、いつでもどこでも現れる。

私達が夢見た明るい未来は。もうどこにも無かったんだ。

「ねえ虎夜ちゃん。私達、何か間違っちゃったの？　戦うだけじゃ、ダメだったのかな……」

「間違ってなんかいないわ、陽奈」

今にも不安に押しつぶされそうな親友を真っすぐに見つめて、私は周囲を見るように促す。

怪物の脅威が去れば、避難していた人々もすぐに活動を開始して逃げ切れなかった人や怪我をしてしまった人を助け出したり、各々ができることで誰かを助けている。

人間は生きている限り誰でもヘカトンケイルになってしまうかもしれない。だけれどもそれに腐らず、負けず、折れずに戦っている人たちが確かに存在する。

夢見た未来じゃなかったかもしれないけれど、それは確かに優しい世界で。傷ついてしまって助け合える、そんな世界がここにあるのだと。だから私達の戦いは間違いじゃなかったのだと、私は思っている。

「だから大丈夫。いつか、きっといつか私達の戦いが報われて。ヘカトンケイルと戦わなくてもいい世界が、きっと来るはずよ」

だって私達は勝利をした。そして人間は、世界は、まだ負けていないのだから。

敗北していなければ、きっといつか未来を勝ち取る。そんな未来を二人でいつか見たいから。

だから今は二人で頑張ろう。私達ならきっとやれるはずだから。

「そっか……うん、大丈夫、だよね！　らしくないなぁ私ったら、弱音を吐いちゃうなんて」

「誰だって落ち込むことくらいはあるんだから気にすることじゃないわよ。気分転換が必要なら一緒にご飯でも食べに行く？」

「いいの!?　やったー！　虎夜ちゃんのオゴリでご飯っ！　ご飯っ！」

「ちょっと！　奢りとは言ってないでしょ!?　待ちなさい！」

落ち込んだ様子もどこへやら、ご飯というワードですっかり元気になった親友を追いかけながら、私はとても安心していた。

やっぱりあの子にはいつも通りの明るい笑顔がよく似合う。たまに落ち込んでしまっても、あの笑顔だけはずっと曇らないでいて欲しい。

いつも通り。ずっとずっといつも通りに、その笑顔が続いて欲しいって、そう願っていたんだ。

「そうだよね、大丈夫……大丈夫、だよね。うん、大丈夫大丈夫……」

だから私は、この大きなすれ違いに、気づかないままでいた。
それがあんな結果をもたらすなんて事を、知らないままでいた。

2

空に浮かぶもう一つの太陽。それは熱量と共に煌々と輝きを放ちながら、未だにそれを増幅させる為の燃料を求めていた。
その正体は、光の世界からこちらに持ち込まれた万能の願望器。
私達が戦った大いなる闇の存在と対となる、究極の自己犠牲によって世界を「正しい」姿へと確変しうる最悪のちゃぶ台返したる存在。
哀れな光の使徒が捧げられる祭壇へと続く道の半ばで、私達は——

「はあああああッ——！」
「やあああああッ——！」

光と光がぶつかり合い、まるで花火のように弾けては消えていく。
剣戟と拳。お互いの得物が魔力を纏いぶつかり合って、その周囲に衝撃を拡散させる。
魔法少女同士の戦いは、極めて拮抗した状態にあった。
それもそのはずだ。だって私達は本当は、こんな戦いは望んでなんていないのだから。

「行かせないッ！　あなたは絶対にあの場所へは辿り着かせなんかしない！」
その言葉と共に、細剣を大上段から振り下ろす。
魔法少女として何度も戦ってきた経験によって洗練されたそれは鋭く、けれど殺気は込めはしない。
命は奪わず、痛みで動きを止めさせようとするその剣閃。しかし——

「ハッ！」

その攻撃は、あまりにも容易く弾かれた。
迫る刃の軌道を、ソレイユはその拳でもって迎え撃つ。
光の魔力を纏ったそれは、例え刃物が相手であろうとものともしない。
その威力に武器を弾かれた私は衝撃で体勢を崩すけれどすぐに立て直す。追撃は——無い。

「どうしても認めてくれるつもりはないのかな。虎夜ちゃん」
真っすぐに、どこまでも真っすぐにこちらを見ながら、ソレイユが——陽奈が私へ問いかける。
認める？　そんな事、あり得るはずがない。
だってそうでしょう？　このまま進ませてしまえば、あの子は必ずその身を捧げる。この世界の為の薪となってしまう。
「そっちこそ、止まる気はないの？　あなたの進む道の先で、あなた自身がどうなるのかなんてわかりきっているのに？　世界なんかの為に、傷つく必要なんて本当にあるの？」
いつだって誰かの笑顔の為に、不幸に泣いている人の涙を止める為に。そうやって走り出せる人間だったからこそ、私はあなたが大好きだった。
けれどそれでも、許容できない事は存在する。だって誰よりも優しいあの子が犠牲になるなんて、おかしいじゃない。
「虎夜ちゃんは本当に優しいね……でも、アタシは止まるつもりなんてないよ。だってこの道の先には、きっとたくさんの笑顔が、誰もが優しく生きられる世界が待っているって、信じているから。だって——」
眼を閉じ大きく息を吸い込み、吐き出す。
そうして一度落ち着いた陽奈の目には、強い覚悟の色が浮かんでいた。
「だって——誰だって本当は、間違う事もなく堕落することもない。誰も傷つくことのない、そんな世界で生きていたいはずだから」

覚悟の宿った、だけど儚げなその顔に胸が痛いほどに締め付けられる。
誰も傷つかない。間違えない。傷を負わなければ、誰かに傷を負わせることもない。
生きていれば誰だって犯してしまう間違いを犯さず。健全に、正しく。後悔を抱えず、胸を張って生きられる世界。
ああそれは――確かに美しく素晴らしいもので。私達二人が夢見た世界でしょう。
けれどその過程に、大切な親友を犠牲にするなんてことは絶対にあってはいけないんだ。
「だから私は行くんだよ、あの太陽へ。その先に何が待っていても。それが私が、魔法少女になった意味だから」
「私は……私は認めない！」
そうだ認めてなるものか。
魔法少女になった意味？　それは本当は、もっと単純で優しいものだったはずでしょう？
今のあの子は、強すぎる光に目が眩んでしまっている。
最初からそうだったのだと私に、そして自分自身に言い聞かせて納得しようとしているだけなんだ。
「自分が耐えて、犠牲になってそれでおしまい。それは違うって言ったのはあなたじゃない！　別の方法を探そうって、手を差し伸べてくれたのはなんだったの！　今のあなたは、自分だけ過酷な道を歩く理由を後付けしてるだけ！」
そもそも、世界が元に戻らなかったのは最初からどうしようもなく歪んでいたせいだ。
闇に侵食されて、元凶を倒しても元のカタチへ戻らなかったのは最初からそうなる下地があったという証。
人はいつだっていとも簡単に闇に染まって。そしてその堕落は不可逆だ。その甘美な味を知ってしまえばもう一度、もう一度。ずるずると楽な方へ行ってしまう。
結局のところ、何も変わらないはずなんだ。悪い人は悪くって、正しい人はバカを見て。
だからこそ私達がすることは何も変わらない。誰かの涙を拭って、笑顔の為に手を差し伸べて。やり直せるって勇気を分ける。
それが魔法少女になる前も、なった後も私達が望んでいた、やりたかったことで。
「間違ってるって言ってるの！　ねえ陽奈、わかってるの？　あなたがやろうとしてることはただの自己満足じゃないの！」
きっと今の私は、酷い顔をしているだろう。もしかしたらもう泣いてしまう寸前かもしれない。
けど、きっとそれはお互い様。だって相手の顔に目を向ければ、そこに覚悟はあっても笑顔はないのだから。
どんなに辛くても、悲しくても、笑顔で居たいと言ったあの子は、今は険しい顔をしている。だから内心ではきっとわかっているはずなんだ。
「それでも……それでも私は行かなきゃいけないの！　だって今諦めたら全部が無駄になっちゃう！　妥協なんかじゃなくて、綺麗ごとなんかじゃなくて。本当に幸せで居られる世界でみんなが生きられるんだよ!?　その為なら、相手が虎夜ちゃんだって……もう、容赦はしないよッ！」
感情を爆発させるようにそう叫んだ彼女の背中から、光によって形作られた翼のようなものが生えてくる。
同時に周囲にまき散らされるのは、圧力を感じるほどに濃密な光の魔力。
それは闇の女王と戦った時にも彼女が見せた、強い意志に光が呼応して目覚めた新たな力。
その力を今、私に向けようというのだ。
「虎夜ちゃん。できればもう、追ってこないで欲しいな。私は大丈夫、大丈夫だから」
そう告げる悲痛な顔すらも見えなくなるほどに、ソレイユの放つ光が強くなっていく。
視界の全てが光で覆われ、その数瞬後に訪れるのはあまりに強い熱量と衝撃。
「待って……待ちなさいよ！　陽奈……陽奈

ァ！」

痛みに耐えながら、何も見えない中手探りで大切な人を探すその手は空を切る。

そしてついに耐えきれなくなり、私の意識は薄れていく。

「……ごめんね、最後までわがままばっかりで」

意識の途切れる寸前、私の耳にかすかに届いたのは、親友のそんな、悲しい言葉だった。

3

次に目を覚ました時、空にはまだ第二の太陽が浮かんでいることに私は安堵した。

ソレイユは、陽奈はまだその身を焼いてはいない。まだ間に合うのだと、止める時間はあるのだと。

けどそれは同時に残酷な現実を私に突き付ける。今の私では彼女は止められない。追い付けたとしても結果は変わらず、力ずくでもその歩みはどうしようもできなかったのだから。

光では、より大きな光には勝つことができない。

その事実が私を大きな絶望へと引きずり込み、そして絶望は、前へと進む意思を無情にも刈り取っていく。

行かせない、止めてみせると。どれだけ傷つこうとも諦めないと。そう誓ったはずなのに。最早体はピクリとも動いてくれない。

無力感と絶望が私を満たす。そんな中、目の前に突如として出現したものがあった。

「これ……って」

まるで石榴のようにも見えるそれは、昏い魔力を僅かに放ちながら脈動している。

見紛うはずもない、あの日私達が倒した悪の親玉。世界のカタチを歪めてしまった元凶。ペルセポネの心臓だった。

「……」

それはただ、脈動するだけで何をすることもない。

心臓だけになっているのだから当たり前だけれど。目の前のそれが何を望んでいるのかはなんとなくわかった。

手を伸ばせ、お前は選ばれたのだと。光に選ばれ太陽に向かって飛ぶあの子とは逆に。あの子の望んだ光を拒絶した私は、その対極の存在へと変わる資格があるのだと。

なればこそ、私はその禁断の果実へと手を伸ばす。最早誰にも止められない、焼かれる運命を受け入れてしまった大切な人を止める。その為の力が手に入るのならば光も闇もあったものか。

掌の中で未だ脈打つその果実に、容赦なく齧りつく。

口の中へと広がる味は甘く、どこまでも甘く蕩けるような血の味で。

甘美なる悦楽と共に溢れ出て体へと浸み込んでくるのは、恐ろしいほど濃密な闇の魔力。

それと同時に流れてくるのは、あまりにも大きい負の感情。

痛い、憎い、嫌だ、どうして私がこんな目に。いっそ諦めてしまえ。死にたいのなら勝手に死なせてしまえ。友達だろうと、命がけで救う必要がどこにある。

湧き上がる魔力と共に私を包み込む、深淵よりも昏い、どこまでも魅力的な声。いっそ諦めてしまえば楽になると、辛いならば手放してしまえという抗い難い堕落への誘い。

「うるさい！」

しかして私は、その誘惑を拒絶する。

だってそうでしょう？　彼女が止まる気が無いのならば、私も止まる道理はない。

彼女は今は、光しか見えていない。その眼を、身すらも焼かれてしまって、世界の半分しか見えていないんだ。

だから私は、止めなければならない。見えなくなってしまったもう半分の、その全てを背負ってでも。

「諦めろ、投げ出せなんて言葉は私に要らな

い！　だって私は止まらない。その言葉で、誘惑で。堕落へ誘って引っ張ってあげなきゃいけないのは、ソレイユ……陽奈の方なんだから！」

誘惑を振り切り、否定し、なお湧き出してくるその甘言。

それを、全て彼女にぶつけてしまおう。闇へと引きずるその言葉、その力、全てを私のものにして。

私が全ての闇ならば、天へと翔けて光へ消えるその少女の運命すらも、全部全部黒く塗りつぶしてやろう。

束ねろ、纏めろ、従えろ。自分の全てを闇へと変えろ！

「私を選んだって言うのなら……大人しく私に従いなさい！」

私の言葉に反応し、溢れ出てくる闇の魔力は一か所に集まり、ある一つの形を形成する。

それはどんな闇よりも黒く染まったルクスジュエル。

「ふ、ふふふ。あはははは！　そう、それでいいのよ！」

思わず笑いがこみ上げてくる。あれだけ苦しめられた、疎ましかったはずの力が、今は私の為ここにある。

「――変身」

その言葉を発すれば、ルクスジュエルからどろりと、まるでスライムのような粘性を持った魔力が湧き出し、私を包む。

さっきまでの侵食するようなそれとは違い、私を優しく包み込み、そして思うがままに姿を変える。

魔法少女としての私は、まるであの子を守る為の騎士のような姿をしていた。

いまでもその気持ちに嘘はない。けれど、あの姿は彼女と共に並んで立つ為のものだった。

今は違う。私に必要なのは、あの子と向かい合って、無理やりにでもこちらに引っ張ってあげるための力なんだから。

――あの時戦った。冥界の女主人。ペルセポネ。

強大で、恐ろしくて。そして哀しかったあの存在のようにならなければ。きっとあの子の足は止められない。

その意思に呼応して、纏った魔力が形を変える。

体を這う魔力が以前のゆったりとした衣装とは対照的に、体のラインを浮かび上がらせるようにピッチリと体に張り付いて、固着化していく。

そしてその上から、脚、胸と下から登っていくように、刺々しく攻撃的なデザインの漆黒の鎧を形成し、体に馴染んでいく。

膝の辺りまで長さを増し、真っ白に染まった髪と、対になる色をした黒いヴェールが風に揺れる。

魔力で形作る剣は、魔法少女であった時よりもより大きく、そして凶悪に。赤く染まった力の象徴とも言えるその刀身を見て、思わずうっとりとしてしまう。

変身を終え、一歩踏み出せばカツン、とヒールが渇いた靴音を鳴らした。

体は動く、前へと進める。そのことがとても嬉しくて。自分で思うよりも先に、体は勝手に前へ前へと、歩を進めていた。

4

長く、長く、無限に続いているのではないかと錯覚してしまうほど長いその道を、私は進んでいく。

邪魔者を諦めさせる為の、一種の試練にもなっているのであろうその道は、それでも私の心を折るには至らない。

この先に陽奈が待っているのだから当たり前だ。諦める道理なんてどこにもない。

「……みいつけた」

そうやって歩を進めていれば、視界の先に動くなにかを捉えた。

陽奈だ。まだ豆粒ほどの大きさでしか見えないけれど、それだけで確信できた。

けれどまだ遠い。向こうも前へ進んでいるのだから、縮まっていく距離は微々たるもので、それはあまりにもどかしい。

「……捕まえて」

そうお願いすると、第二太陽の光で長く伸びた私の影の中から何本もの腕が道の先へ伸び、一直線に陽奈の方へと向かっていく。

その光景はまるで地獄の亡者のようで、以前の私であればおぞましいと。そこまで思わなくてもあまりいい感情は抱かなかったであろうもの。

だけど今は、それが心強く。頼り甲斐があると私は感じていた。

「あら……」

しかしその亡者達は陽奈の体を捕らえることはなく、飛来するそれに気づいた陽奈の浄化の力でかき消されてしまう。

けどそれでいい、私の存在に気付いた彼女は、必ずこっちに来てくれる。

その証拠にほら、振り向いたあの子の視線が、私を認識した。

まだ距離は遠い、それでも目と目が合った。それだけで、まるで初恋をした時のように気分が高揚する。

「嗚呼——陽奈。今すぐ私が、救ってあげるから」

こちらへ走って来る陽奈、私も待ってなんか居られない。

光と闇、対極に位置する超常の力を持っている私達の距離は、驚くほど速く縮まって。

五百メートル、三百メートル、百メートル。
近づいていくごとに私は巨大な剣に闇を纏わせ、彼女はその拳に光を集める。
「ソレイユッ！」
「リュンヌッ！」
そして――零。待ちわびた距離に入った瞬間に、光と闇はぶつかり合い、弾けた。
「どうして……どうしてわかってくれないの？　そんな姿になってまで、今のこの世界をそのままにしておく意味なんてあるの!?」
体勢を立て直したリュンヌはそう吠える。
何故と問う側が逆転していることがなんだかおかしくて、少しだけ笑ってしまう。
「なにがおかしいの!?」
「おかしいわよ。だって、あなたもわかっているんでしょう？」
何故、どうして。そんなもの、最早意味はなくなってしまっているのだ。
結局のところ、二人の主張は平行線で、闇を選んだ私には、最早光は交わらない。
「どちらも止めようとしても止まらない。あなたが光以外の全てを否定したいと言うのなら、私はあなたの求める光を否定する。結局こうするしかないのよ、私達」
私のその言葉を聞いて、陽奈は静かに構えを取った。対する私も、剣を構える。
かつては二人並んで戦っていたあの頃を、少しだけ懐かしんで感傷に浸る。
けれどそれも一瞬、最早お互い言葉は不要で。
彼女は前へと進むために、私はあの子を死なせない為に。
譲れない願いを握った二人は、今再びぶつかり合った。

蒼き花は巣食われる

小説／離宮
挿絵／せみいつ

この世界の何処かにあって、何処にもない場所。天にまで届くような大樹を中心に幻想的な美しい花々と木々が地平線の果てまで続く。大樹や木々にも美しい花々が咲き誇り、その空間は華々しくも可憐で、柔らかな明かりと仄かで清涼な香りで満たされていた。聖樹の大庭園と呼ばれるその場所で、その場に似つかわしくない悍ましき異形と、それに立ち向かう二人の少女の姿があった。

「行くよ、てるなちゃん！」

「うん、行けるよ、あかり」

ブラウンの長髪を靡かせる小柄な少女・橘あかりと、色素の薄い髪をツインテールに結った色白の少女・樫原てるな。二人の少女は駆け出すと、淡い光が二人の姿を覆う。学校の制服姿は、体の動きを阻害しないボディスーツに花弁のようなスカート、花の装飾に飾られた姿へと変化する。

「聖樹を護る陽光の剣、花聖騎士アミリア！」

「魔を封じる鎖、花聖騎士、エルテミス」

二人はそれぞれ緋色と蒼色に彩られた華やかな装束を身に纏い、異形に挑む。

「今日こそ仕留めてみせる！」

聖樹の大庭園は魔力を浄化する世界のろ過装置とも言える存在である。汚染された魔力は滞留すると魔物を生み出し、高濃度の魔力は生物を魔獣化させることすらある。魔蟲とは、異界から聖樹の大庭園に侵攻してきた者たちであり、その目的は一致してはいない。聖樹や聖花を利用するために略奪しに来たもの、汚染された魔力を求め大庭園を破壊しに来たもの、中には力ある戦士をツガイとして手中に収めようとしているものまで様々である。

今回あかりとてるなが相対している魔蟲、巨大な魔蜘蛛は、数度にわたってあかり達と交戦していた。高い知性を持った狡猾な敵であり、何度か追い詰めたものの、取り逃がしている相手であった。常ならばもう一人の仲間、日向ルミアと三人で挑むところだが、偶然別の蟲にルミアが対応している最中での遭遇戦となってしまった。

（ルミアが、居なくたって……）

蒼い花に彩られた戦士、てるなは魔力を練り上げ物質化させていく。実体を持った魔力は薄く長くどこまでも伸びるリボンの形を成して、てるなが振るうと魔蜘蛛めがけて勢いよく伸びていく。てるなの魔法、自在に誘導される魔力の帯を魔蜘蛛は器用に躱していくが、あかりが進路へ待ち構え魔力で形成された剣を振り下ろす。幼馴染みであり、共に花聖騎士の力を聖樹より授けられたあかりとてるなは、抜群の連携で魔蜘蛛へダメージを与えていく。

（もっと踏み込んで、捕らえる……！）

てるなは魔蜘蛛の進行方向に躍り出て、リボンを多数編み出し、魔蜘蛛を拘束しようとする。着地の隙を的確に狙い、魔蜘蛛の四つの脚をリボンが絡め取り、一瞬その動きを止める。

「わたし、だって……！」

てるなは更に接近しリボンを魔蜘蛛の首に絡めとどめを刺そうとする。普段ならばあかりに攻撃を任せるところだが、強敵相手であること、この場にはいないルミアへの対抗心が、てるなを逸らせる。

「てるなちゃん！　避けて！」

追いすがるあかりの警告とほぼ同時に、こちらに向き直っていた魔蜘蛛から多量の糸と毒液を吐きかけられる。

「ッ…！」

毒液を避けきれなかった箇所は燃えるようにひりつく痛みに苛まれ、糸によって身体の自由も奪われる。てるなの力では魔蜘蛛の糸を全く振りほどけず、苦悶の表情を浮かべることしかできない。

「拘束魔法が、破られる…!?　あかり！」

藻掻くてるなの眼前で、囚えた魔蜘蛛を拘束する蒼いリボンが嫌な音を立て千切れていく。

「大丈夫、任せて！」

あかりは、てるなの稼いだ時間で体勢を立て直し、力を溜めていた。即座に魔蜘蛛へ間合いを詰める。

「必殺技、いくよっ！」

あかりの手元に光が凝縮していく。何重にも織り込まれた光は剣のように細長く集積され、まばゆい光を放つ。魔蜘蛛も只ならぬ気配を察

してか接近するあかりを激しく迎撃する。
「くそ、止まれ……！」
てるなは不自由な姿勢で必死に魔蜘蛛を足止めしよう魔力の帯を放つ。出来損ないのリボンは振り払われた足や放たれた毒液で呆気なく霧散していく。
「あかりッ……！」
「大丈夫、間に合ったッ！　当たれ、ソレイユ・フルー！」
姿勢を低くし魔蜘蛛の腹へ潜り込んだあかりが叫びながら光の剣を突き刺す。必殺の一撃となる燐光の剣、ソレイユ・フルー。あかりの放つ最大最強の技であり、形成した光の剣を投射し光の速さで貫くが、誘導はできず多用もできない賭けの一撃。足止めが解けかけている中であかりはリスクを冒し接射で放つ。浄化の光は魔蜘蛛を内側から焼き払う。断末魔のような奇声も僅かの間に消え去り、魔蜘蛛は跡形もなく消え去っていた。
「やっと倒せたね、てるなちゃん……」
煮え湯を飲まされていた相手を倒したことで、あかりは安堵し表情を緩める。
「うん……あかりは、凄いね」
「てるなちゃんも頑張ったじゃん！　私達の勝利だよ！」
朗らかに笑うあかりの姿に、てるなの胸の内にも温かな気持ちが沸き起こる。
（二人でも、勝てた。だけど……最後、失敗、だった）
自分のミスであかりに心配をかけさせ、最後は危険な叫喊までさせてしまった。ずきり、と心臓が痛んだような気がした。
「てるなちゃん……？」
「ん……大丈夫、なんでも、ない」
魔蜘蛛の反撃も受けていて、てるなは自覚以上に疲れていたことに気づいた。僅かに痛みと違和感があるが、魔力が治癒力を促して傷もほぼ治りつつある。ぶちまけられた毒液には汚染された魔力が含まれているが、花の精霊の魔力はまもなく浄化してしまう。一晩も経たずに浄化しきれるだろうと、てるなはそれ以上気にすることはなかった。
「はぁ……わたし、あかりの役に立ててる、かな……」
灯も点けず薄暗いままの自室、帰宅してからベッドで鬱々としたまま、てるなは何度目かもわからないため息をもらす。もう一人の花聖騎士・ルミアの力ならば、今日のように敵の拘束に失敗するようなことはなかったように思えてしまう。それどころか、自前で強烈な攻撃のできるルミアは、てるなよりも遥かに優秀な存在に思えてくる。
「あかりの役に立てるのは、隣にふさわしいのは、弱いわたしなんかじゃ、ない……」
力が欲しいと思うことは幾度もあった。てるなは敵の拘束や索敵、足場を作るなど仲間の支援はできたが、十全に使いこなせている自信は持てずにいた。加えて、敵を直接攻撃する術には乏しいため、攻撃一辺倒のあかりと役割分担をしていた。
しかし、状況は変わってしまった。少なくとも、てるなの中では。三人目の花聖騎士として目覚めた同級生、帰国子女の日向ルミアは、クラスの人気者であり、あかりともすぐに友人となっていた。誰とでも気さくに接することのできる彼女は、てるなにも親しく接してきているが、てるなにとっては苦手な存在であった。人付き合いも戦いも、てるなよりルミアの方が優れているように思える。自己嫌悪から湧き上がる劣等感は、てるなの思考にこびりついていた。
「このままじゃ……あかりは、きっと、私よりも……」
独白ですら口にするのが辛い未来予想。唯一にして最愛の友人が、自身以外を選ぶ妄想をどうしても払拭できない。
無意識に溢れた涙に気付くこともなく、ドロドロとした感情を抱えたままてるなは微睡みに身を委ね意識を手放していく。
自身の内側から沸き起こる穢れた魔力に、てるなは気付けなかった。

何時間眠っていたのか、てるなは寝苦しさから目を覚ます。相変わらず心境は鬱々としており、むしろ眠りに落ちる前よりもドロドロとした感情が渦巻いているように感じてしまう。
「……何だろう、気持ちが、全然抑えられない……」
目尻から熱い感触を覚え、自身が涙を流していたことに気づく。寝起きの鈍った感覚が徐々

に目覚めていく。涙を拭おうとするが、腕が動かない。

「……!?　蟲の、魔力…!」

自身を包囲する魔蟲の魔力に、とっさに感覚を研ぎ澄ますが、蟲の気配はない。身体をベッドに縛り付けているのは、まるで蜘蛛のような魔力で織られた糸。

「魔蜘蛛の糸…!　取り逃して、いた……?」

身体の自由が効かない中で、首を傾け身体の拘束部を確認するてるな。無意識に変身していたのか、花聖騎士の衣装を身に纏っており、糸は四肢や衣装、身体のいたるところに絡みつき、あるいは張り付いて、てるなを仰向けでベッドに磔にしている。

「この位、なら……!」

どうせ変身しているなら話は早いと、てるなは花聖騎士の魔力を引き出し四肢に力を込め、強引に糸を引きちぎり身を起こす。糸は風化し草臥れていたかのようにぶちぶちと呆気なく千切れていくが、呆気なさとは裏腹にてるなの魔力は消耗していた。

「はぁ、はぁ……一体、何が、起きてるの……?」

拘束からは逃れているのに、体が鉛のように重く自由に動かない。魔力の消費がずっと続いているかのような感覚がてるなを苛む。

「魔力が、溢れて……!」

眼の前が一瞬真っ白になると同時に、今までにないほどの魔力の放出に身体から力が抜けていく。虚脱したてるなの視界には、自身の身体を縛り上げる、拘束魔法の蒼いリボンが映る。その色は斑に脱色されており、リボンは頼りないほど細く末端は解れつつある。

「これ、さっきの、魔蜘蛛の、糸……!?」

慌てて取り払おうとするが、リボンは解れ、細い糸となりてるなの身体にまとわりついていく。リボンの原型をとどめているところは容易く千切れるが、解れた糸は厄介なほどに強靭で全く切れない。

「……ッ!　また、魔力、がッ…!」

明滅する視界、溢れ出る糸の形を象る魔力。てるなの身体は、自らが生み出し続ける魔力の糸によって包み込まれていく。

「や、やだ、何で、こんな……」

自らを取り巻く魔力が、自身から溢れる魔力が、魔蟲たちのそれと同質なものであることがわかってしまう。とめどなく魔力が溢れるたびに、てるなの意識は薄れていく。繭と化した魔力塊の中で、てるなは藻掻こうとするが、高密度の魔力糸は身体の自由を許さない。

「あかり、たすけ、て……」

身体に食い込む糸から、魔蟲の魔力へと変質した力がてるなの肉体へと逆流していく。良くないもの、悍ましいものが体内に溜まり、澱んでいく。身体が熱を持っているのに、芯から冷めていく感覚がてるなを襲うが、脱する術がない。

（とても、とても強い、糸…魔力も、これまでより、ずっと濃厚で、ずっと強い……）

むしろ蓄積されていく力に、仄暗い魅力を感じてしまう。あかりにも、ルミアにも、見劣りする自らの力。頼りないリボンは、強靭な冷たい鋼線となり、二人にも容易くは破れないだろう強さを感じてしまう。どんなものでも捕らえられる、思うままに、自在に……そんな期待が、てるなの脳裏をよぎってしまう。

（だ、だめ、抵抗、できない……）

力を欲してしまった心の隙に、魔蜘蛛の魔力が染み込んでいく。早鐘のように心臓が脈打ち、うるさいほどの鼓動が聴覚を占める。全身に魔力が循環していき、体温が削ぎ落とされていく。

（身体から、ナニか、でてくる…!?）

背中を何かが突き破り、神経があらゆる信号を撒き散らす。てるなは気を失いかけるのを持ち堪えると、自身の背から生じる新たな感覚に気付いてしまう。

（これ、蟲の、脚…?　私の身体から……!?嫌ッ……!）

自身の身体が蟲の魔力を受け入れ変容しつつあることを嫌でも理解させられてしまう。恐怖と焦燥にてるなはパニックになり、ジタバタと藻掻こうとするが、繭はびくともしない。新たに生じた蟲の脚が、自らの意思でのたうち回るという現実だけがてるなに突きつけられる。魔力によって具現化している花聖騎士としての衣装も変質しつつあるのか、肌に張り付いて離れず不快感を催す。

（抜け出さないと、身体も、魔力も、おかしくなる……!）

焦りが増していく中、魔力の逆流は続いていく。蟲としての魔力が増していき、花聖騎士の

せみいつ

浄化の力は霧散していく。
（うぅぅ……お尻、何か、が……！）
メキメキ、と骨格が軋む音とともに、てるなの臀部が引き伸ばされ膨張していく。
（痛い、気持ちいい……あかりに、会いたい……！）
衰弱していく心のなかで、たった一人大切なあかりだけを拠り所に意識を保つ。てるなの肉体は大きく歪み始め、細く長く腕が伸びていき、膨張していた臀部は蜘蛛の下腹部を形成する。
（あ、あか、りぃッ……）
魔蟲の魔力が全身に回りきる。脳も、あるいは魂も、蟲のものへ染め上げられていく。肌から血の気が抜けていき、花聖騎士の衣装は地肌と癒着し、飾り毛のような鞭毛が身体を彩る。
てるなの存在が作り変えられていく。
いつもなら助けに来てくれる最愛の友人は未だに来ない。
それでもてるなは、最愛の友人を求め、涙をこぼしながら意識を闇に沈めていった。

夜は更け、月明かりは厚い雲に遮られている。か細い街頭がカーテンの隙間から差し込む唯一の光源となり、一筋の光以外闇に塗りつぶされた少女の部屋の中。胎動に揺らめく巨大な繭の中で、てるなは微睡んでいた。乾きや飢えのように、自身から抜け落ちた花聖騎士の力を取り込みたいと身体が悲鳴を上げている。未だに訪れないあかりに、僅かな怒りと、早く逢いたいという気持ちがこみ上げてくる。てるなは、己の肉体が変わり果て、強大な力を得ていることを理解していた。新たに生じた腕や器官も、本能が理解している。これだけの力があれば、あかりを自分の元から離さずにいられると、歓喜が湧き上がる。
てるなの瞳が闇色の中で妖しく輝きを増していく。

大庭園での戦いの後、てるなと別れたあかりは、てるなの元気の無さを心配し何度もSNSでメッセージを送っていたが既読がつかず気を揉んでいた。結局日付が変わる頃に寝付いたあかりだったが、強力な魔力の気配に飛び起きるハメになる。時計を見れば、午前二時を回っていた。
「うぅん……こんな夜中に、魔蟲……？」
目を擦りながら意識を振り絞って身を起こし、洗面台で顔を洗い眠気を削ぎ落とす。
「てるなちゃんの家の方、だよね……？」
SNSアプリを立ち上げるが、てるなからの連絡は来ていない。それどころか、寝る前に送ったメッセージの既読すら付いていない。
「まさか、不意打ちされた……？　それに、これだけ強い気配の魔蟲が、現世に出てきてるなんて……」
あかりは花聖騎士の姿へ変身すると、魔力を纏って肉体強化を行う。そのまま屋根へと飛び上がり、てるなの家へ駆けて行く。
「ルミアちゃんにも連絡……こっちは既読ついたね！」

画面を見やればルミアからも魔蟲の出現に反応し、これから向かう旨が届いている。
「ルミアちゃんの家は遠いから、時間がかかっちゃうか……てるなちゃんが捕まってるかもしれないなら、私だけでも行かないと！」
あかりにとって、てるなは幼馴染みで、最も大切な友人の一人であり、今では秘密の戦いに身を投じる仲間でもある。花聖騎士として選ばれたときも、共に戦うことを選んでくれた大切な友達。引っ込み思案でつい世話を焼いてしまうが、芯の強さもある。てるなは、ルミアと並んであかりのかけがえのない大親友であった。戦いの中でも何度もサポートしてもらい、彼女がいなければ勝てなかった戦いもあった。
「どうか無事でいて、てるなちゃん……！」
てるなと合流し、時間を稼げばルミアもやってくる。三人揃えば敵わない敵などいない、あかりは自身を奮い立たせ深夜の街を駆け抜けていく。

「やっぱり、てるなちゃんの家……不意打ちだよね、大丈夫かな……」
てるなの両親はほとんど家を空けており、今日はてるな一人で過ごしているはずである。あかりはてるなの部屋の窓へ飛びつき、魔力の遠隔操作で鍵を開け室内に侵入する。
「何、これは……!?」
てるなの趣味で落ち着いた色調と小物で彩られていたはずの部屋は、見る影もない惨状となっていた。小物も、壁も、床も、部屋のいた

るところに光を鈍く反射する糸が張り付いており、ベッドのあった辺りには繭のような巨大な白い塊が鎮座している。

「てるなちゃん……？　そこに、いるの……？」

鼓動のように、脈打つ繭は、人間一人を包むことも容易いサイズであり、てるなが閉じ込められているならそこだろうと、あかりは警戒しながら一歩ずつ踏み出していく。

粘着く糸の感触に顔を不快げに歪め、てるなを捕らえた「敵」がいないか気配を探る。張り巡らされた糸自体が魔力で作られたものであるのか、魔力の気配は周囲に散らばっている。糸の塊である繭は当然、折り重なるような魔力の堆積で一際強い魔蟲の気配を漂わせる。

（てるなちゃんの魔力も少しだけど感じる……やっぱり、繭の中に……？　敵は居なくなった……？）

確証は持てないが部屋の外には気配を感じない。訝しみながらも、てるなを救出するためにあかりは繭に手をかけようとした。ぬちゃ、と水っぽい音が部屋に響くとともに、何かが繭を突き破りあかりの腕を掴む。

「ッ!?」

咄嗟に手を引こうとするあかりだが、びくともしない。足裏に張り付く糸が急速に硬化し、文字通り手も足も出ない状態にされてしまう。あかりは続く攻撃に身構える。

「あかり」

しかし、攻撃は来なかった。代わりに投げかけられた、聞き慣れた声。

「てるな、ちゃん……？」

安心と不安が同時に加速していく。あかりの腕を掴むその手は、暗がりの中でも血の気がないように見える。その手は冷たく、爪が食い込むほどに力強い。

「てるなちゃんなの……？　今、引っ張り出すから……！」

違和感はあるが、あかりは親友の救助を優先しようとする。

「嬉しいな、あかりは、いつも、私を助けようとしてくれる……だけど」

親友の声音が、急速に温度を下げたかのように冷たくなる。

「てるなちゃん……？」

「ルミアを待ってたの、かな……？　遅いよ、あかり……」

あかりの腕を掴む手の力がより強まる。爪が食い込み、血が流れ始める。

「繭からはもう、助けてくれなくて、いいの」

「ッ…痛いよ、てるなちゃん……！　離して……！」

今まで親友に抱いたことのない恐怖感が、まるで敵と相対したときのような悍ましさが、あかりに明確な拒絶感を抱かせる。

「ひどいなぁ、あかり……わたし、とても強くなったのに……」

てるなの声音が増々冷めていく。拒絶や懐疑を向けられる度に、てるなのドス黒い衝動を加速させていく。あかりの目の前で、不快な水音を立てながら繭が裂けていく。粘つく液体と魔力糸をかき分けながら現れた親友の姿は、あまりにも変わり果てていた。

「魔蜘蛛ッ……!?」

眼の前にいるソレは、人の姿と蜘蛛を足し合わせたような怪物、あるいは怪人とでも言うべき存在だった。血の気を感じさせない青白い肌は、引きこもりがち故に色白ながらも朱が差して可愛らしかった親友の肌色ではない。真っ白に冷たく光を反射し身体に絡みつく白い髪は、くすんだ黒色で光を通す艶やかな親友の髪ではない。硬質で身の丈程もある大きな触腕など、親友には生えていない。胸元のリボンや髪飾りは花聖騎士のもののようであるが、禍々しい目玉や触手へと変質している。

親友の面影を大いに孕む怪人に、あかりは言葉を失くす。

「どんな獲物だって、もう、逃さない。強くなったよ、あかり……」

親友の顔をした怪人は、親友のいつもの笑い方で微笑む。

「嘘でしょ、てるなちゃん……偽物、なんでしょう……？　本物のてるなちゃんは、どこなの……」

震える声で、希望的観測を尋ねてしまう。

「本当に、ひどいよ、あかり……」

てるなの顔から笑みが抜け落ちる。

「わたしが、本物。わからないの……？」

心の底から、責め立てるような失望の声音で親友を名乗る怪人は嘆く。ソレから感じられる魔力は、親友のものであり、濃厚な魔蟲の魔力

でもあった。
「違う、こんなの、こんなこと……」
身動きを封じられ、信じ難く耐え難いものを突きつけられ、あかりはうわ言のように否定することしかできない。
「あなたは、てるなちゃんじゃない……！」
怒気を孕んだあかりの否定に、てるなは悲しげに表情を歪める。
「わたしが、樫原てるなだって、信じてくれないんだ……姿が変わったから？　それとも、友達じゃ、ないから……？」
「何を言って…!?」
「わたしはルミアより役に立てないから？　それとも、わたしが暗くておどおどしているから……？」
溢れ出す劣等感の発露に、あかりは只管困惑する。隙を伺おうとしていたが、様子の変化に戸惑ってしまう。
「わたしの魔法では、なにも、繋ぎ止められなかった。わたしが弱いから、あかりは、離れていっちゃう」
「本当に、てるなちゃんなの……？」
強大な魔力を放ちながらも消え入りそうな様子に、あかりは相手が本当に親友が変じたものであると、恐ろしい現実を受け入れていく。
「信じて、くれるんだ……？」
てるなの表情からわずかに憂いが晴れる。相手が魔力に寄って変じた人間ならば、花聖騎士のやることは唯一つ。
「てるなちゃん、ごめん、私、慌てて…とにかく、浄化しよう！　まだ理性がある、今のうちに」
笑顔のてるなは、きょとんと不思議そうに首を傾げる。
「浄化…？　それはできない、かな……」
「何を言って……」
「花聖騎士の変身や、魔物化とは、違うんだ」
てるなは、何故か嬉しそうに、偉大な発見をしたかのようにあかりに告げる。
「仮初でも借り物でもない、わたしの身体、わたしの力、わたしの魔法」
恍惚の笑みでてるなは語る。あかりの四肢に糸が絡みつき、身体を拘束する。
「てるなちゃん、何を言ってるの……操られてるの……？」
「わたしはね、生まれ変わったみたい。身体の隅から隅まで、ぜんぶ、蟲になっちゃったの。リボンを解いて、その糸で全く別のものを編むみたいに。繭の中で蟲の魔力を染み込まされて、ぜんぶ蟲になっちゃった」
絶句するあかりを気にせず、淡々と、確かめるように自身の変質を語るてるな。
「大丈夫、あかりのこと、ちゃんと、覚えてる。わたしは、わたしのまま」
耳に馴染むいつもの親友の声と淡々と語られる恐ろしい現実に、あかりは希望に縋る以外の道を失ってしまう。
「……てるなちゃんが、てるなちゃんのままなら、本当に嬉しい。」
「あかり……」
「ごめんね、どうしても、身構えちゃってた。どんな姿でも、てるなちゃんのこと、信じてあげないといけなかったのに……」
弾けるような笑顔で、てるなはあかりの身体を抱き寄せる。すっかり冷たくなってしまった身体に、時折してくれていた甘える仕草。
「わたし、ずっと、前から……あかりのこと、大好きだったの……」
「わ、私も、てるなちゃんのこと、好きだよ」
「愛してるの、好き、だよ？」
あかりは漸く、てるなと互いに抱いている感情の温度差に気づく。かけがえのない親友の一人と思っていたあかりと、たったひとりの最愛の幼なじみと想うてるな。あかりは、親友の想いを繋ぎ止めなければならないと、ここで拒絶すれば二度と手を取り合えないと確信してしまう。初恋すら未体験のあかりに、てるなの愛情を完全に受け入れられるかは、わからなかった。それでも、あかりはてるなを受け入れようと、親友を独りにはできないと、決意する。
「こわかった。あかりが、ルミアと仲良くなって、わたしから離れて、いっちゃいそうで……好きって言うのも、こわかった」
「私には、恋愛とかちょっと…よく、わからない、けど……てるなちゃんのこと、拒絶したりしないよ！」
「あかり……」
てるなは安堵と歓喜の混ざった表情であかりの顔を寄せる。
愛するものが傍にいる安堵感に裏打ちされ

た、安心しきった笑み。
　こんな表情は殆ど見たことがなかったなと、あかりはぼんやり想う。
「もう、離さない。ずっと」
　あかりの顔にてるなの腕が優しく添えられる。あかりは何となく恥ずかしくなり目を閉じると、唇と唇が重なり、てるなの冷たい舌があかりの口腔へ侵入する。
（〜〜〜ッ！）
　初めてのキスで深く舌を絡め合うことまで考えていなかったあかりは、てるなの蠢く舌に翻弄される。
　思わず見開いた視界いっぱいに広がる、友人の顔。舌の冷たさのようにぬくもりを感じない青白い肌は、親友の静かな美しさを妖艶に引き立てている。舌を絡め合いながらも親友の美しさと儚さに思わず見とれてしまう。うっとりと目を閉じ愛おしそうに接吻を味わう親友の顔はとても穏やかだった。
　永遠のように永く感じる接吻の、僅かな息継ぎ。お互いに上気した表情で、僅かな静寂が訪れる。あかりは、穏やかで幸せそうな友人の顔をずっと見ていたいと心の底から願う。そのためにも、大切な友人をこのままヒトの敵にしてはいけないと、自分は立ち上がらなければならないと、あかりは己を奮い立たせた。
「てるなちゃん、やっぱり駄目だよ、このままじゃ！」
「え……？」
　穏やかな雰囲気から一転、力強い眼光を携え、浄化の力を立ち上らせるあかりに、てるなは呆然とする。
「てるなちゃんと一緒にいられるのは嬉しい。だけど、魔蜘蛛になんて…負けられない！　だから……」
　だから、魔蜘蛛の力を受け入れないでほしい、元の体に戻る方法を一緒に探そう、そう続けるつもりの言葉は、最後まで紡がれなかった。
　てるなにとって、魔蜘蛛とは既に自身の力であり、己そのものだという認識となっていた。あかりによる魔蜘蛛への拒絶は、幸福の余韻を断ち切る拒絶の振る舞いとしか見えない。
「わたしがこの身体じゃ、だめなの？　花聖騎士のちからが美味しそうに感じちゃ、だめなの？」
「てるなちゃ、ん……!?」
「もう、いいや」
　てるなは先ほどとは打って変わった乱暴な手付きであかりの顔を手繰り寄せ、口づけを再開する。不意を突かれたあかりはされるままになっている。てるなの舌によってこじ開けられた口の中へ、不快な感触の塊がねじこまれる。あかりは抵抗しようとするも、舌を絡められ力が抜けていきままならない。押し込まれる形で、強烈な魔蟲の気配を放つ塊を無理矢理嚥下させられてしまう。自身の中へ魔蟲の魔力が入り込む感覚に、あかりの理性は大音量で警鐘を鳴らす。しかし、執拗に舌を蹂躙され、唾液を流し込まれ、ろくな抵抗は叶わず、腹の底から悍ましい感覚があかりを塗りつぶしていく。
（嫌だ、何かが私の中から…！）
　花聖騎士の浄化能力も覚束ず、じわじわと魔蟲の魔力が身体へ浸透していく。自身に巣食う魔蟲の魔力が花聖騎士の力を貪り、勢いを強めていく。全身に染み込んでいく穢れた魔力が、瘤のように留まり肉体を歪め始める。臀部の違和感が急激に弾けるような感覚とともに、尻尾のように長い蟲の尾部が形成されていく。どうにかして押さえつけられた身体を引き離そうとするが、てるなによる拘束はびくともしない。
　体の中心から広がるように魔蟲の気配が侵食していく。てるなの身体を押しのけようとした腕が、急速に引き伸ばされ変形していく。滑らかな肌は硬質化していき、細長い指が癒着しながら鋭く長く伸びていき巨大な鎌へと変化していく。
（やだッ！　やだ、お尻が、腕が……！）
　花聖騎士としての力が貪られるごとに、花聖騎士としての衣装があかりの肉体と溶け合い一体化していく。透き通るような肌は、てるなと同じく血の気を失っていく。変質した肉体を蟲の魔力が巡り、花聖騎士としても、あかりの存在自体としても塗り替え作り変えていく。
「あかりは、わたしだけのものになるの。わたしだけの、蟲の騎士。わたしの思いのままに動いて、わたしを、絶対に一人にしないの」
　てるなは、蟲として作り変えられつつあるあかりの姿を愛おしそうに眺める。
「絶対に、ずっと一緒だよ、大好きだよ、あかり……」

せみいつ

魔力の浸透が全身に及んだ感覚とともに、あかりの意識は急激に遠のいていく。
（私、は……てるなちゃんを……救えなかった……）
妖しく黄金に輝くてるなの瞳以外の全てが視界から消え、やがて全ての視界が暗黒に閉ざされる。
（ごめん、てるなちゃん…ルミアちゃん……）

月が雲に隠れた昏い町中を、黄金色の閃光が駆け抜ける。
花聖騎士ルミエール、日向ルミアは、奇襲されたらしい友人の元へと全力で駆けていた。
「てるなも、あかりも返事がない……大丈夫かしら……」
あかりからのメッセージも十数分前に受信したきりで、返事には既読がついていない。てるなの家に着くと、二階の窓が開け放たれている。
「魔力は感じるけど、誰の気配もない……罠かもだけど、行くしかない……！」
ルミアは一跳びに開かれた窓から部屋内へ飛び込むと、周囲は強力な魔力の波に覆われ、視界が歪む。周囲の景色が歪むと同時に浮遊感と着地感があり、転移魔法が発動したことを察知する。
「大庭園の蟲の巣……予想通り、かな」
現世にまで現れる魔蟲も、狩りはホームグラウンドたる巣で行うことが多い。見渡せば聖樹の大庭園の美しい木立であっただろう一角であることがわかる。しかし、彩り豊かな花々や瑞々しい葉を広げた木々は、至る所を糸で覆われ、白く寒々しい不気味な景色となっている。
「来てあげたわよ、二人を返してもらうわ！」
影になっていて姿は判然としないが、前方の暗がりから濃密な魔の気配が漂っている。ルミアは油断なく眼前を睨め付ける。二体の魔蟲が動く。
（敵は二体……あかり達は奴らの背後……？）
先制の一撃を撃ち込み混乱に乗じて二人の仲間と合流、数の優位を逆転して正攻法で仕留める……ルミアは作戦を整理し、身構える。
蟲達が一歩踏み出したとき、雲間に隠れていた銀月が顔を覗かせ木立に光が差し込む。
影が払われ、魔蟲の姿が顕となる。
「あかり、てるな……なの……？」
てるなの姿をした魔蜘蛛が、その口元を歪める。
「遅かったね、ルミア……いや、ルミエールって呼んだ方が、いいのかな」
仲間の顔と声で、魔蜘蛛は語りかける。背後に蜘蛛の脚が蠢き、紡がれる銀糸が月明かりを反射し瞬く。
「わざわざ飛び込んできたのなら、悪い蟲を、私達をやっつけに来たんだよね？」
嘲笑を浮かべ、てるなは一歩踏み出す。
「そんな、どうして、二人とも……？」
ルミアは動けない。驚きと混乱に呆然とする。てるなの傍らで、てるなの蟲の脚から伸びる銀糸が閃くのに合わせてもう一体の魔蟲が身体を揺らす。その姿は花弁のように華やかで、花聖騎士の装いにも似た姿をしていたが、決定的に異なる。花弁のような外殻から覗く巨大な鋭い鎌、跳ねた毛に見せかけた長く伸びた触覚、花飾りが歪められたかのような蟲の瞳。てるなに絡みつくように抱きしめられ、銀糸によってその身を意のままに操られる蟲は、よく知る仲間の、橘あかりの顔をしていた。
「る……みあ、ちゃ……」
何事かを呟こうとしたあかりの姿をした魔蟲は、最後まで言葉を紡ぐことは叶わず、妖しく月明かりを反射する鎌をもたげる。
「あかり、勝手に動いちゃ、だめだよ」
てるなが蟲脚を手繰れば、銀糸が揺らめきあかりの肉体をルミアへ正対させ、身の丈に迫る二対四振りの鎌が煌めく。
「それじゃあ、始めようか、ルミア……わたしの、わたし達の力、見せてあげる」
てるなは獰猛な笑みを目障りな元仲間へ向ける。力と愛するモノを手に入れ、邪魔者を排除する。蟲に巣食われた少女は、己が満たされるために魔力を練り、銀糸を手繰る。
花の少女たちに救いの夜明けは訪れない。

せみいつ

二人の世界

小説／星空カナタ
挿絵／家畜

唐國穂乃佳は孤独だった。

娘を見向きもしない両親。

自分を空気のように扱うクラスメイト。

みすぼらしい服を着る少女に向けられる世間の冷たい視線。

一四年という短い歳月で幼気な少女が孤独を理解するには濃密すぎた日々。

代わり映えもせず、延々と繰り返される孤独な日常が唐突に終わりを迎えるなどその時の穂乃佳は思いもしなかった。

「大丈夫？」

なんの前触れもなく崩れ落ちた家屋からやっとの思いで抜け出し、額から流れ出た鮮血で視界の半分を奪われた穂乃佳に優しい声が降り注いだ。

訳もわからず差し出された手を取れば、穂乃佳の目の前には色鮮やかなフリルがふんだんにあしらわれた可愛らしい衣装を身に纏い、柔らかな笑みを向ける少女の顔が間近に迫る。

自身が抱き締めるように抱えられているのだと穂乃佳が気付いたのは、少女のすぐ近くで不可視の壁にぶつかる異形の存在を目にした時だった。

――怪人。

最近になって突如として現れ、何一つ正体が知れず、ただ無秩序に破壊を繰り返す異形の化け物。

ニュースでも取り上げられていたためその存在を認識していた穂乃佳だったが、それはテレビの向こうの、自分とは縁遠い出来事だと思っていた。

「あ、あのっ!!」

「ごめんねっ!! 今ちょっと手が離せないんだ！」

声を上げる穂乃佳に少女はそれだけ言うと、穂乃佳を抱えたまま空へと飛び上がる。瞬く間に地面が遠ざかり、夜の帳が落ちた街全体を一望できる高度へと到達していた。

目まぐるしく変わる状況に思考が追い付かず、気付けば穂乃佳は見知らぬ高層マンションの屋上に降ろされていた。

本当に訳がわからなかった。

遥か遠くに見える自宅付近で繰り広げられる激しい戦闘らしき光景を眺めながら呆然としていた穂乃佳だったが、幾ばくもしない内にその光景も見えなくなった。

「お待たせ！ まずはその傷治しちゃおっか!! 女の子は顔が命だからね!!」

怪人を倒してきたのだろう。可愛らしい衣装を擦り傷や埃で汚した少女は戻ってくるなり穂乃佳に笑いかけ、そのしなやかな指を持つ掌をかざせば穂乃佳の前身は淡く優しい光に包まれる。見る見るうちに傷は塞がっていき、それどころか流れた血や倒壊に巻き込まれて汚れた寝巻が元の姿に戻っていく。

まさに魔法と呼ぶべき事象を目の当たりにして、平凡で孤独なだけだった日常が裏返る予感を感じ取った穂乃佳は瞳を輝かせた。

「あのっ！ どうやったら私も貴女みたいになれますか?!」

「え？一番に聞くのがソレ？ 怪人とか私の事とかじゃなくて??」

クスリと笑われた穂乃佳は自身の常識のなさを笑われたように感じて羞恥で赤面するが、それでも今の孤独に満ちた運命を変えられるならばと、恥を忍んで真っ直ぐに目の前の少女を見返した。

「君、面白い子だね。ただどうやって私みたいになれるか、かぁ……」

「やっぱり難しいんですか？」

「そうだねぇ。こればっかりは運というか、私もよく分からない所があるからなぁ……」

「そう、ですか……」

〝運〟という言葉に穂乃佳は俯いた。なんのとりえもなく、誰からも見向きもされない自分にそんなものがあるとは思えなかったのだ。ただよほどひどい顔をしていたのだろう。俯く穂乃佳に少女は慌てた様子で言葉を続けた。

「ま、待って……そ、そうだ!! 今、君が私みたいになれるか、ここで確かめてあげる!!」

「ほ、ホントですか……？」
「う、うん!!　でも、それでダメだったとしても怒らないでね……？」
「はい、約束します」
抱いた諦念を完全に払拭する程ではないものの、ほんの僅かに繋がった希望へ縋るように少女を見つめる穂乃佳。
そんなに期待されても困るのだけど、そんな風に呟きながら少女は穂乃佳の胸に手を当てる。
「魔法少女の力の源――私は魔力って勝手に呼んでいるけど――それを君の身体に送り込むからね。もし君に魔法少女になる素質があれば、きっとそれで、君は魔法少女に成れるかもしれない」
「は、はいっ！」
穂乃佳が頷くのが早いか、覚悟をする間も無く少女の手が触れた胸元からじんわりと暖かい〝ナニカ〟が身体中を巡り始める。しかし幾ら待てどもそれだけしか変化は現れない。
二人の間に気まずい空気が流れ、どちらともなく口を開こうとした時だった。
「えっ、うそ……」
「なに、これ……？」
少女が触れていた胸元を基点に、突如として穂乃佳の全身を眩い光が包み込んだ。
そして光が収まった時、色気のないスウェット姿から可愛らしいフリルがふんだんに使われ、まるでアイドルのような可愛らしい姿――よくよく見ればそばに立つ黒を基調とした少女と対を成すように白い衣装――へと変わった穂乃佳は目を点にした。
まさか自分に、孤独で誰からも見向きもされないような平凡な自分が魔法少女になれるなど思ってもいなかったのだ。
「誤魔化すためにテキトーに言ってみただけなのに、この娘ホントに魔法少女になっちゃった……」
「あの、コレって……」
「え、う、うむ、予定通り!!　き、君はこのなつ……違った、サマー様のお陰で魔法少女の力を見事手に入れたのだ!!」
「魔法、少女……」
呆然と白の手袋に覆われた手を見下ろした穂乃佳は知らず識らずの内に拳を握り締め、自分の変化を噛み締める。まだ見た目が変わっただけに過ぎないが、それでも今までの自分から変われるという確かな予感があった。
「あの、それで、これから私はどうすれば……？」
「えっ?!　あ、えーとぉ……オッホン!!　それじゃあ新米魔法少女である君にこの夏姫先輩――じゃない、サマー先輩が手とり足とり魔法少女の何たるかを教えてあげよう!!」
「分かりました!!　よろしくおねがいします、夏姫先輩!!」
「……君、実は分かってて言ってない？って、まぁ、もういっか。それじゃあ先ずは自己紹介、私はサマーこと柊 夏姫、一五歳。世に蔓延る悪の怪人を打ち倒す正義の魔法少女さ!!」
柊夏姫との出合いを境に穂乃佳の人生は大きく変わった。
魔法少女としての力を手にし、自らも変わろうと決意したこともあって穂乃佳自身が積極的に人と関わるように努力した。その成果もあって穂乃佳を取り巻く状況は少しずつ好転していった。
ただし万事が万事、上手くいったわけではない。
今までの環境を変えようとするのはそれほど容易なことではないのだ。それに加え、魔法少女として怪人と日夜戦い続ける生活は決して楽なものでは無かった。
時に傷つき、時に挫けそうになることもあった。
それでも助けた人々が口にする〝ありがとう〟の一言が励みとなり、孤独で要らないものとされてきた穂乃佳の存在を肯定する言葉が嬉しかった。
なにより魔法少女の先達であり、私生活でも一緒にいるようになった夏姫の存在が穂乃佳には大きな支えとなっていた。
怪人との昼夜問わない辛く厳しい戦いを繰り返す中、魔法少女として背中を預け合いながら戦ってきたことで、二人はお互いを掛け替えのない存在として認識するようになっていたのだ。
それこそ、ただの親友や戦友という枠組みでは収まらないほど大きな存在として。

家畜

「そう言えばさ、最近私達のことを変に言う奴が結構いるみたいなんだよねー」

そして新たな日常と化した怪人との戦闘を終え、いつも通り魔法少女から何処にでもいる女子中学生の姿へと戻った夏姫はスマホを弄りながらそんな事を言った。

訳を聞けば、夏姫はスマホの画面を穂乃佳へと向ける。

「『コイツ等みたいな魔法少女のせいで怪人が増えてる』『自分が目立つ為に怪人を作り出してるマッチポンプ野郎』……なにこれ？」

夏姫が開いたＳＮＳの画面には、そんな文言と共に魔法少女の姿をした夏姫と穂乃佳が戦っている姿を写した写真が添えられていた。まるで自分達が元凶のように宣い、むき出しの悪意に晒された穂乃佳は背筋に冷たい物を感じるのだった。

幸い魔力のお陰で写真に写る姿を今の二人に結び付けられる者は居ないが、それでも人の隠そうともしない悪意は幼さの残る二人に恐怖を与えるのには十分だった。

「うーん、私達のことが知られてきて変な奴が湧いてきちゃったんですかね？」

「そうかもしれないけど、他の魔法少女の子にはこういう投稿はされてないのだよねー」

魔法少女は夏姫と穂乃佳だけではなかった。怪人被害が増えるにつれ、日本全国各地で魔法少女が現れるようになったのだ。今では二人が知る限りで二〇人近く魔法少女は存在し、二人がこうして話している間にも新たな魔法少女が生まれているかもしれない。

「そう言えば、私は夏姫先輩に魔法少女にしてもらったけど、夏姫先輩はどうやって魔法少女になったんですか？」

「どうって言われてもなー。目の前に怪人が現れて、襲われそうになった時に気付いたら魔法少女になってたんだよねー」

「なんかそれ、夏姫先輩らしいと言えばらしいですね」

「あ、それはどういう意味だコノヤロー!!　ことと次第によっては許さんぞー!!」

二人は覚えた恐怖を誤魔化すように明るく振る舞い、中学生らしく姦しく騒ぎながら繁華街を見て回る。そしてとあるアクセサリー店の前までじゃれ合っていた二人が、ふと視線を向けた先にあった一つの品に目が向いた。

「わぁ！　コレ綺麗ですね!!」

「ホントだ！　ねぇ、これそんなに高くないし買っちゃおうよ!!　アンクレットだから学校とかで着けてても見つからないよ！」

「あ、良いですね！　じゃあ二人で同じの買ってお揃いにしませんか？」

「流石穂乃佳ちゃん、それ良いアイディーア!!」

仲良く展示されていたアンクレットを買った二人はその場で身に着けながら笑い合い、再び会う約束をしてその日は解散となった。

だが、二人の約束は叶わなかった。

別れた日を最後に、夏姫は忽然と姿を消したのだ。

◇　◇　◇

「マジカル☆ビームッ」

夏姫と額を突き合わせて考えた技名を叫びながら魔力で作り出した極大の光線を放ち、穂乃佳は弱らせた怪人を消滅させる。

自分の放った光線がいつも通り民間人や建物に被害を出さなかった事を確認し、穂乃佳は怪人の攻撃に巻き込まれた人々の救出に従事する。

しかし穂乃佳の隣に夏姫の姿は無かった。この一週間のうちに二度現れた怪人と戦っている時も夏姫は姿を見せず、連絡すら付かなくなった。

「……やっぱり、なにかあったのかな」

救出を喜ぶ人々に笑顔で応えた穂乃佳は遅れてやってきた警察や救急に後の仕儀を任せ、隠していた不安に背を押されるように飛び立ち、夏姫が暮らす街へと向かう。

「ここなら誰にも見つからないよね？」

そっと人気のない住宅地の路地に降り立ち、魔法少女の姿を解いて制服姿に戻った穂乃佳は人目を避けるように走り出す。そして幾ばくもしない内に夏姫が暮らす一軒家の前に辿り着いた穂乃佳がインターホンへ指を伸ばした時だった。

「唐國穂乃佳さん、ですね？」

「え？——」
確認を取る体を成していながら確信を持った声に穂乃佳が振り向いた瞬間、首筋にチクりとした痛みが走る。
咄嗟に飛び退こうとするが弛緩した四肢は言うことを聞かず、不様に倒れ伏した穂乃佳の意識は急速に闇の中へと沈んでいく。
「まったく、手間かけさせやがって……」
ボヤけていく意識の中、吐き捨てる男の言葉を最後に穂乃佳は完全に意識を手放した。そして次に意識を取り戻した時、穂乃佳はコンクリートが剥き出しの部屋に居た。

「おや、もうお目覚めですか？　やはり一号同様、天然物の魔法少女は薬物にも耐性があるようですね……」

朦朧とする意識の中、届いた声に穂乃佳が首を捻れば白衣を着た見知らぬ男が立っていた。当初はぼーっと男の不気味な笑みを眺めていた穂乃佳だったが、ある瞬間から意識が完全に覚醒すると、自分の置かれた状況を即座に理解した。
咄嗟に暴れようとした穂乃佳だったが直ぐに自分の四肢が拘束されている事に気付き、このままでは不味いと判断した穂乃佳は魔法少女へと変わろうとした。
だがいくら魔力を巡らしても、穂乃佳の姿が変わることはなかった。
「なんで変われないのっ?!」

「あぁ、それは今君がしている首輪のせいだね。その首輪をしている限り、君は魔法少女の力を使うことはできないよ」
「そんな……」
魔法少女へ変われないことに青褪める穂乃佳だったが、同時にある事にも気が付いた。
「貴方怪人じゃない、ですよね。なのに、なんでこんな事をするんですか……？」
「ん？　あぁそうか、一号と同じく君も何も知らないんだったね。そうだなぁ、端的に言うと君のような自然発生の魔法少女に活躍されると困る人間が居るんだよ。例えば人工的に魔法少女を作っている政府傘下の秘密組織、とかね？」
「魔法少女を、作る……？」
まさかの言葉に穂乃佳の思考は真っ白に染まる。しかし考えてみれば得心がいく話でもあった。
なにせ穂乃佳が魔法少女になってから現れ始めた他の魔法少女達は皆一人で活動しており、その行動範囲も示し合わせたように誰一人として被っていなかった。
仮に穂乃佳のように誰かの手を借りて魔法少女になったり、夏姫のように怪人に襲われて覚醒したのならば行動範囲が一切被らないのは可笑しいのだ。
「さて、少し喋りすぎてしまったかな？　これでも私は忙しい身でね、ここらで失礼させてもらうよ」
「ま、待ってください!!　私はこれからどうなるんですか？　殺されるんですか？」
「私が君を殺す？　まさかっ！　そんな勿体ない事をするわけないじゃないか!!」
殺されないと知った穂乃佳は僅かに安堵しそうになったが、直ぐに穂乃佳の直感が安堵するには早すぎると告げた。
穂乃佳に背を向け、扉へと歩いていく男が振り向きながら見せた表情が悪意に満ち満ちていたのだ。それこそ、今まで戦ってきた怪人たちと勝るとも劣らないほどに。
そして穂乃佳の直感は正しく、男と入れ替わるように入ってきた複数の人間の手によって地獄が作られた。

「あぁぁぁぁぁあああぁぁぁあああああああああ!!」

防護服に身を包み、性別すら判然としない者たちに押さえつけられ、一本の注射器が穂乃佳の細腕に突き刺さる。
僅かに冷たい感触が腕の中を流れた直後、穂乃佳の意思に反して身体が大きく跳ねる。更に遅れて全身を内側から蝕むような激痛が襲いかかり、まるで細胞一つ一つが作り変えられていくような痛みと感覚に、穂乃佳は本能的に理解した。
注射器の中身が怪人に由来した物であると。
なぜ人間がそんな物を持っているのかという疑問を投げ捨て、穂乃佳は体内を巡る怪人の細胞を抑え込もうと必死に魔力を操った。しか

し一度身体の内側に入り込んだ異物は消え去るどころか穂乃佳の魔力をも喰らい始める。
それでも時間を掛けて抑え込み、慣れることのない激痛が収まっても、追加の注射器を刺されて再び死ぬよりも苦しい地獄が繰り返される。
一本目、二本目、三本目と怪人の細胞を注射される度、穂乃佳が持つ魔力は食われ続け、痛みが収まるまでの時間は伸びていく。そして空になった注射器が三〇を超えた時、穂乃佳が注入される細胞を抑え込むまで一〇日以上要するようになってしまった。
それでも穂乃佳は耐え続けた。
今、こうしている間にも穂乃佳が姿を消した事に気付いた誰かが捜索、あるいは救出に動き出していると信じていた。何より魔法少女になったあの夜のように、窮地に陥った穂乃佳を助けに夏姫が来てくれると確信していたのだ。
「ふぅむ、私たちが作った魔法少女なら許容量はとっくに超えているはずなんだけど、一号検体と同じく怪人化の兆候はまったく見られないね。やっぱり人工と天然では埋められない何かがあるんだろうね」
「はい。ですが二号検体の魔力はほぼ尽きておりまして、これ以上は人工魔法少女たちに採取させた怪人細胞を投与しても一号と同じ結果で終わってしまうかと」
「結局、人工と天然で差異を生じさせた要素は分からず仕舞いか……仕方ない。希少な検体を失うのは勿体ないし、天然物の部位サンプルは一号で必要量は確保できてる。業腹だけど本研究は一時縮小して経過観察に移行しよう。上からは魔法少女や怪人なんていう謎な生物の解明なんかより、人工魔法少女製造の効率化に関する研究に力を入れるよう言われてることだしね」
「分かりました。ただ研究の規模縮小となると使える部屋が限られますが、二号検体の観察に使用する場所はどうしますか？」
「一号を収容してる部屋でいいんじゃない？どうせ一緒になったところで何もできないでしょ」
捕まってから何日経ったのかも分からず、ただ虚ろに天井を見え上げていた穂乃佳の耳に男達の会話が届く。そして直ぐに四肢を拘束されたままストレッチャーで別の部屋へと運ばれ、穂乃佳はゴミを捨てるかのように床へと雑に投げ捨てられた。
床に打ち付けられた痛みに悶える余力もない穂乃佳は四肢を投げ出した格好のまま、ほんの僅かに残った魔力を全身へと巡らして少しでも痛みが和らぐ時を待った。
一日が経ち、思考を巡らす余裕が生まれた穂乃佳は自分が放り込まれた部屋の中央に何かが存在している事に気が付いた。
二日が経ち、首を動かせるようになった穂乃佳が視線を向ければ、中央の椅子に誰かが座っている事に気が付いた。
三日が経ち、視界が定まり始めた穂乃佳は座っている人物が性別も分からないほどサンプル収集という名の拷問をされた後なのだと理解した。
そして四日目、椅子に座って身動ぎ一つしない人物に這い寄った穂乃佳は慟哭した。
短く雑に切られた髪に艶はなく、瞳を奪われた眼窩は深い闇を抱え、渇ききった唇には幾本もの亀裂が走り、全身には夥しい量の血糊がこびり付いている。
元の顔どころか性別すらも分からないほど醜く痛めつけられていたが、それが誰であるかが穂乃佳にはすぐに分かった。
分かってしまった。
大量の血が広がる椅子の下、拘束具によって椅子の脚に縛られた右の足首に一つのアンクレットが汚れた輝きを放っていたのだ。
穂乃佳の左足にある、同じデザインをした色違いのアンクレットが。
「なつ、き、せん……ぱい……」
必死に這いずり、椅子に辿り着いた穂乃佳は拘束されたまま力なく俯き続ける夏姫の身体を抱きしめる。
穂乃佳も薄々は感づいていたのだ。

姿を消した夏姫が何処にいたのか。
正義感溢れる夏姫がなぜ助けに来ないのか。
なぜ男達が魔法少女について既知であるかのような口振りをしていたのか。

それでも穂乃佳は認められなかった。
夏姫が先に捕まり、穂乃佳よりも更に過酷な責苦を受けているかもしれないという恐怖を。しかしどれだけ穂乃佳が否定しようとしても、今見ているものが、触れているものが、感じるものが、全て現実だと告げていた。
「なんで、私達はただ、皆を…助けたかった……だけなのに……」
穂乃佳が呟いた瞬間、内側から何かが湧き立つような感覚を覚えた。それは憎悪、あるいは怒り、あるいは憎しみと呼ばれる感情だった。
しかし、ただの憎悪ではない。
何十と打ち込まれ、穂乃佳の魔力に抑え込まれた怪人達の細胞に宿っていた際限なく生み出される人間に対する負の感情。苦痛をもたらし、魂までをも侵食しようとしていた怪人の力。
それをギリギリの所で堰き止めていたのは穂乃佳の善性であり、心の支えである夏姫の存在だった。
しかし穂乃佳が心の支えにし、愛情と呼べるほどに慕っていた夏姫を無惨な姿に変えたのが敵対していた怪人ではなく、守ってきた人であるという事実。それが穂乃佳の善性に、精神性に、疑いをいだかせてしまう。
自分たちを痛めつける人間を助ける意味はあるのか、と。
その疑念は堅牢な防壁の屋台骨を引き抜くに等しく、最後の砦を失ったことで抑え込まれていた怪人の細胞は瞬く間に穂乃佳の全てを飲み込んでいく。
更に抗う意思の欠けた穂乃佳の自我もすぐさま飲み込まれ、ありとあらゆる負の感情が混ざり合い、もはや自分の感情なのか怪人の細胞が持っていた感情なのかも判らなくなりながら、穂乃佳はどうしてという言葉を繰り返す。
何十、何百、何千もどうしてと繰り返す内、穂乃佳は一つの答えを導き出した。

――――世界が自分を、自分たちを捨てたのだと。

それが一四年の孤独な歳月を経験した穂乃佳が心の奥底で燻ぶらせていた感情から来たものなのか、それとも自分を飲み込んだ怪人がその身に宿す負の感情によって捻じ曲げられた答えなのかは分からない。
それでも今の穂乃佳にとってはそれが事実であり、真実だった。
例えこれが極一部の人間による凶行だろうと、二人以外の人間の総意だろうと関係ない。身を投げ打って守ってきた人の手によって、穂乃佳自身と大切な夏姫が傷付けられたことに変わりはないのだから。
「許さ、ない……」
実験の過程で切り裂かれた穂乃佳の四肢は瞬く間に塞がり、床を染める血液が糸となって繭のように穂乃佳を包み込む。そして暗く息苦しい繭の中、穂乃佳は怪人の細胞によって身体と共に記憶や倫理感すらも書き換えられていく。
助けてきた人々の感謝の言葉は以前夏姫が見せてくれたＳＮＳの投稿のような罵詈雑言へと変わり、培ってきた道徳心は破壊衝動に上書きされ、夏姫と出逢うまでの全ての記憶が憎悪によって黒く塗り潰されていく。
「絶対に、ゆるさない……」
一緒に繭の中に取り込まれた夏姫を抱き締め、穂乃佳はあらん限りの力で食い縛る。すると今まで揺るぎもしなかった首輪が一瞬で錆付き、軽快な音を立てて砕けながらコンクリートの床に転がった。
「せんぱい、こんどはわたしが、たすけますからね……」
穂乃佳は力を取り戻した両腕で夏姫をより強く抱き締め、夏姫の渇いた唇に自分の唇を当て、舌を割り入れる。
歯を奪われ、切り取られて短くなった夏姫の舌へ自分の舌を絡ませ、穂乃佳は自身の身体に流れる魔力を送り込んでいく。しかしそれは夏姫から分け与えられた魔力とは違い、内に渦巻く憎悪と怪人の力に染まった穢れた魔力。
二人を結び、溶け合うように魔力が循環していくと次第にその総量は増していき、一定の域を超えると羽化を始めるように繭がほどけ始める。

家畜

そして全ての血の糸がほどけると、その中央に居たのは穂乃佳の面影を残したまったくの別人だった。

「あぁ、今まで必死に耐えてきたのが馬鹿馬鹿しく思えるぐらい清々しい気分だわ……」

艶のあった黒髪は白銀へと変わり、健康的だった肌は血の気を失い、日本人らしい黒い瞳は鮮血を思わせる真紅の瞳へと変わっていた。

更に穂乃佳の周囲を漂う魔力は人智を超えた怖気を撒き散らす。

怪人の力でより大人びた姿に生まれ変わった穂乃佳が腕を伸ばせば、解けて床に散らばっていた血の糸が新たな服を創り上げていく。

柔らかな印象を与えていた魔法少女の衣装とは打って変わり、生まれ変わった穂乃佳が纏うは純黒の刺繍が施されたコルセットドレス。

ふわりと広がるフィッシュテールのスカートから覗く脚にはヒールが履かされ、頭にはティアラが、手には肘丈のグローブが嵌められた豪奢な姿。

白を基調としていればウェディングドレスのようにも見えただろうが、穂乃佳が纏うのは世界との決別を示す純黒のドレス。

穂乃佳は今までとは比べ物にならない力が漲る身体を見下ろし、満面の笑みを浮かべて振り返る。

「世界が私達を捨てたんじゃない、私達が世界を捨てるのよ。そうでしょう、〝せんぱい〟？」

そっと穂乃佳が差し出した手の先には、同じように黒いウェディングドレスを身に纏い、しかし穂乃佳とは違って目元を隠すベールを着けた夏姫〝らしき〟人物が立っていた。

成長した姿のようにも見える夏姫は何も語らない。それでも穂乃佳は自分の手を無表情で取る夏姫に笑みを返し、薄汚れた天井を見上げて顔を顰めた。

「その前に要らない物を二人で片付けましょう。私達の幸せな世界には不要なゴミを……」

穂乃佳が呟いたその瞬間、一人の魔法少女が扉を蹴破りながら現れる。その少女は二人の姿を視認すると即座に手に持った機械デバイスから魔力を放出しようとして――――穂乃佳が雑に振るった魔力に引き裂かれて周囲に血と肉片を撒き散らす。

「作られた魔法少女って本当に弱いのね。こんなのを使って一体何をする気だったのかしら？」

夏姫の手を引きながら穂乃佳が血溜まりを踏み越えていけば、穂乃佳の背後で魔法少女だった肉片が寄り集まり、少女の似姿をした新たな怪人が生み出された。

「この場所にいる人間を全て殺してきなさい。そうすれば役立たずだった貴女も、少しは誰かに役に立てたのだと思えるでしょう」

穂乃佳が視線を向けることなく呟けば、怪人は即座に駆け出した。そして間もなくして研究所中が絶叫と悲鳴に包まれ、穂乃佳にとっては愉快な、人間にとっては絶望の幕が上がった。

機嫌良く夏姫を連れて歩く穂乃佳は通り過ぎた場所に転がる死体を全て怪人へと変えていき、研究所の出口に辿り着く頃には引き連れる怪人は一〇〇を優に超えていた。

「二人で幸せになりましょう。二人だけで、二人だけの世界で……」

その宣言と共に怪人たちを外へと解き放った穂乃佳は夏姫と唇を交わし、頬を染めながら細くしなやかな指を絡めて星が広がる夜空へと飛び立っていく。

そして多くの怪人が放たれたその日、世界から一つの街が消え去った。

数多の瓦礫と骸が転がる景色を作り出した穂乃佳はそれでも笑みを絶やすことはない。何故ならそこは誰も犯すことができない、穂乃佳と夏姫のためだけの世界なのだから。

そして老いも若きも男も女も区別なく、例外なく誰一人として生きる者がいなくなり、灰燼によって創り上げられた小さな世界で穂乃佳は微笑み続けた。

穂乃佳と夏姫を討ち取れる、新たな魔法少女が二人の前に立つその時まで。

家畜

なまはぐれ

片想い中の黄魔法少女をお姉様系女幹部が洗脳悪堕ちさせちゃう話

小説／暮さくれ
挿絵／だいぞう

「お前たち、よくやった！　ワッハッハッハ！」
ヘイト団・団長のヘイトメテオは豪快な高笑いを上げていた。その前にかしずくのは、艶やかなロングドレスを纏った黒ずくめの美女。羽根飾りのついた幅の広い帽子を被り、肩からは柔らかそうなファーがたっぷりのストールを垂らしている。
「お褒めいただき、光栄にございます。これも、彼女のおかげですわ。……さあ、ご挨拶を」
軽く振り返ると、後ろにもう一人。年端のいかない少女が同じように膝をついて、かしこまっていた。髪は黒く、愛らしいフリフリの衣装を身に着けている。彼女はゆっくりと立ち上がると、口を開いた。
「この姿では、お初にお目にかかります。名を改めまして――」

＊＊＊

金井ひなた、中学二年生！　彼女は町の平和を守る愛の戦士ラブリープリンセスの一人！
彼女はなんと、デートの待ち合わせをしていた。天気は快晴。朝の陽ざしは彼女の笑顔くらい眩しく、広い公園の一角にある噴水のしぶきを照らしている。ひなたはそわそわして腕時計を確かめたり、鞄から手鏡を取り出しては、シュシュで結んだオレンジ色の髪束を整えたりしていた。「ひなたちゃん」と名前を呼ばれ、彼女は上擦った声を放った。
「望月先生！　おはようございます！」
待ち人の到来に、ひなたは目を輝かせた。手を上げてそれに応えたのは、左目が前髪で隠れた黒いショートカットの女性だ。歳は大学生くらい。白いワイシャツにライトグレーのスラックスを履いている。
「おはよう、今日も元気いっぱいだね。にしても、集合時間にはまだ随分早いのに、もう来てたんだね……」
「はい！　早起きしたので！」
「私とのお出かけを楽しみにしてくれたのかな？　嬉しいな。それに、今日は一段とおめかしさんだね。とても似合っているよ」
今日のひなたは、袖がフリルになったブラウスに、丈の短い山吹色のサロペットを着ていた。アルトボイスの褒め言葉に照れて、彼女は頬が落ちそうなほどふにゃふにゃの笑顔を零す。
「えへへ～。先生もいつも通りカッコいいです」
望月は慎み深く微笑み、「ありがとう」と返し、そして仕切り直すように続けた。
「今日はよろしくね？　今日が、最後だから」
「はい……。留学してからもお話できますか？」
「ひなたちゃんこそ、家庭教師がいなくなってもお勉強できるかい？　ここで油断して元の赤点に戻らないようにね」
「頑張ります！　それに、今日は、先生といっぱいいっぱい楽しむって決めたんですっ！」
「うん……うん。最高の思い出を作ろう。でも、まだ映画までは早いから、少し公園を散歩してから行こうか？」
「はい！」と気持ちのいい返事をするひなたに、望月は右腕を差し出した。
「お嬢さん、お手をどうぞ？」
望月は含み笑い、芝居がかった口調でそう言った。「いいんですか!?」と、ひなたは戸惑い半分喜び半分にそれにくっつく。顔を見上げると普段は隠された左目が見えた。石鹸の香りを楽しみつつ、ひなたは心の中で意気込んだ。
（もう一つ、決めたこと！　今日、絶対に！望月先生に告白するんだ！）
「望月先生、遠くに行っちゃうのは分かっています。でも先生が大好きなんです」
「実は私もなんだ、ひなたちゃん。……けれど、私は講師の立場だから言い出せなくて」
望月はまつ毛の長い目を伏せた。その手を取って、ひなたはギュッと握りしめる。
「そんなの関係ないです！　もう留学なんて止めて、あたしと一緒にいてください。そしてもっといろんなことを教えて……」
「いいや、それはできないんだ。けれど約束するよ、必ず帰ってくるって。約束の証に……」
（ってイケボで言われて、顎クイされて。『そんな、先生ぇ！』『目を閉じて、ひなたちゃん』って言われて、それでそれで、チューを……！）
ひなたがそんな妄想している間に、売店の前

に差しかかると「何か飲む？」と望月は指をさした。
「オレンジジュース！」
「フフ、やっぱり。好きだね～。私はコーヒー……そうだ。そこで待っていてくれるかな？」
彼女は長財布を取り出しつつ、一人店内へ向かった。ひなたは近くのベンチに座る。突然、悲鳴が聞こえた。同時に腕時計からアラートが鳴る。画面を見て、ひなたは悪態をついた。
「ヘイト団！　もうっ、こんなときに……！　場所は……この公園!?」
ひなたの前を人が走り去っていく。そちらを見てから、彼女は売店を見た。ガラス窓の向こうでは、望月が店員と話しながら、お菓子を選んでいるようだった。笑いながら頷く姿を見てから、再びひなたは逃げてくる人々へと視線を向ける。彼女は立ち上がり、走り出した。
（行かなきゃ！　ごめんね、先生……）

＊＊＊

変身！　ひなたの体が金色に光り輝く。セミロングだった髪は長く伸び、色も橙色から鮮やかなブロンドヘアに。その結び目には太陽を模した髪飾りがあしらわれていた。衣装も、フリルと布地がたっぷりのワンピースに変わる。けれど相変わらず動き易そうな短い丈だ。最後に彼女の胸元にハート型のブローチがきらめいた。黄色い石でできており、リボンで飾られている。
「あまねく全てに、温かい光を！　ラブリーサニー！」
高らかに口上を述べると、サニーは早速、ヘイト団と対峙した。ヘイト団の団員たちは一様にゴーグルをつけ、手近な一般人と顔を合わせて、まなこを覗きこんでいた。すると、その人は黒いオーラを
「ええいっ！」
その寸前で、サニーはステッキを振るった。そうして正気を取り戻した人は異様な光景に恐れおののき、へっぴり腰になりながらも逃げていくのだった。サニーはバットを振るうように杖を振り回していく。
「ひなたちゃん！　ひなたちゃん！　どこに行ったんだ！」
聞き慣れた声がして、思わず振り返る。すると、逃げ惑う人の流れに逆らって、望月がこちらに向かってきていた。思いつめた顔で周りを見渡している。彼女の元へ、ヘイト団の一人が迫る。
「させないんだからぁっ！」
サニーは高く跳躍し、ヘイターと望月の間に割って入った。華麗なターンを決め、ステッキを構える。それに気圧され、ヘイターが退くのを彼女は見逃さない。杖を振り、光と共に近くの団員たちを吹き飛ばした。
「お怪我は大丈夫ですか!?　ここは危険です。逃げてください」
「それはできない。探しているんだ、ちょうど……君と同じくらいの歳の女の子を。オレンジ色の髪をシュシュで結んだ子を、どこかで見かけなかったかい？　大切な人なんだ。だから置いていけなくて」
サニーは言葉に詰まる。突如、彼女は寒気を感じた。どこか遠く、けれどそれなりに近いところに、途轍もなく不穏な気配を察したからだ。そちらの方を見ていると、望月に腕を掴まれた。目を見開いて彼女を見返すと、真剣なまなざしにドキリとしてしまう。
「君に、頼みがあるんだ」

＊＊＊

「そこにいたか」
新たなヘイターたちを率い、巨躯の男が現れた。襟高のコートに身を包んだ彼の目つきは鋭い。サニーは狼狽える。
「あなたはヘイト団の団長！　どうしてここに！」
「お前がラブリーサニーか。そうとも。俺が団長、ヘイトメテオだ。こうして顔を合わせるのは初めてだったな。活躍は聞き及んでいるぞ。……邪魔をされたという形でだがな」
サニーは望月に小声で言った。
「せ……お姉さん、逃げてください。あたしが、あいつを引きつけている間に……！」
震える望月の盾になるように前に出ると、メテオを見据えて彼女は叫ぶ。
「どうして！　あなたは、カインドハート……みんなを思いやる気持ちを奪うの!?」

だいぞう

「無論、誰もが愛される世界を作るためだ」
「えっ、ええっ!?」
「そのためには、カインドハートなど失くすべきだろう？　俺は痛く共感したのだよ、誰にも愛されぬ者の苦しみに。皆が皆を思いやる世界にいるにもかかわらず、それが自分の頭の上だけでやりとりされるのは、あまりに不公平ではないか？　だが貴様には、到底分かるまい。誰からも愛される姫君に、愛されない辛さなどは」
　サニーは目だけでチラッと望月の方を見る。
「それくらい分かる！　それに、あんたは間違っている！　誰にも愛されない人なんていない！　だってあたしたち、ラブリープリンセスがいるから！　あたしたちは愛の戦士！　だからみんなを愛する！　それに、カインドハートがあれば誰でも他人に優しくできるの！」
「ハハハハハ！　良いよい。それでこそ、ラブリープリンセスの一員だ。この大嘘つきめ」
「なんですって！？」
「最も罪深き嘘つきは、自分が嘘を吐いていることにすら気づけない正直者だ。覚えておくがいい、ラブリープリンセス。所詮、博愛など欺瞞だと。あまねく全てを照らすものなどありはしない。知らぬだろう？　皆が温かい布団で眠るなか、凍えないためだけに夜通し歩き続け、皆が起きるころにやっと床に就ける者の惨さなど。俺はそんな世界が酷く憎たらしいのだ。……ところで、何をしている」
　メテオの視線がサニーから外れる。疑問と共に彼の目線追うと、望月がまだそこにいた。俯いたまま……。
「どうしてまだ……！　脚、竦んじゃいましたか？　安心してください、あたしが引っ張ります。だから走りましょう、一緒に！」
　サニーが手を取ろうとした矢先、彼女の肩に手を置いて望月は横に首を振った。そして「下がって」とでも言うように前へ踏み出す。しかし足取りは覚束ない。彼女は独り言のように言葉を紡ぐ。
「ごめんね、ひなたちゃん。傷つけると分かっていたから、何も知らせないままお別れしたかった。できれば、いい思い出だけを残してあげたかったのに。……さようなら、ちゃんと挨拶したかったなぁ。けど、もう行かないと」
「そいつは危ないの！　近づいちゃダメ！」
　サニーは彼女の右腕にしがみついた。けれど、望月はそれをやんわり引き剥がす。面と向かうと悲しげなまなざしで見つめ返され「私のお願いを、必ず叶えてね」と念を押された。立ち尽くすサニーを置いて、重い足で進んでゆく。そうして望月はメテオの元へたどり着くと、膝をつき、こうべを垂れた。
「神童とまでうたわれたお前が、研究も進めず、カインドハートの収集すらせず、呼び出しにも応じないなど。幹部にあるまじき体たらくだな」
「申し訳ございません」
　信じがたい光景に、サニーは竦み上がった。杖を握る手が震えている。なのに、そのさまを見守ることしかできない。
「成果を上げよ、ノルマをこなすのだ。ひとまず、ここの人々からカインドハートを奪ってこい。仕掛かりは俺がやった。お前が引き継げ」
　そしてメテオはラブリープリンセスを見据え、堂々と宣った。
「公平に誰もが愛される世界のためには、誰もがただ一人のみを愛し、その相手から愛されるようにすべきなのだ。脇目も振らず、各々がその一人だけを愛すれば、この世界は素晴らしいものになる！　誰一人として取りこぼされない、そんな愛すべき世界に！」
「そ、そうしてペアを作った果てに、あんたが最後に一人だけ残る、愛されない人になってもいいの!?」
「当然だ。愛ごときでは、俺の信念は揺らがない。よいか、小娘。信念はときに愛より人々に寄り添うのだよ。太陽よりも、熱く苛烈に、傷を残すほどに！」
「あんたの信念がどうであっても、みんなの悪意を掻き立てるのは間違ってる！」
　彼は鼻息と共に皮肉めいた笑みを見せつけ、コートの裾を翻す。「あとは任せたぞ」と、彼は望月とヘイターたちを残して去っていく。「待って！」と叫ぶサニーを制止したのは、望月だった。と同時に、彼女は闇に包まれる。
「追わせない。君の相手は、私だ」
　闇が晴れ現れたのは、もはや清廉な王子様ではない。妖しい魅力を放つ女主人は、背筋を伸ばし、つばの広い帽子を目深に被り直した。
「私の名前はヘイトムーン。といっても顔見知り。わざわざ挨拶するまでもなかったかしら？」

＊＊＊

夕方、ひなたは自分の部屋にあるベッドに横になっていた。ぼうっと天井を見上げ、手にした小さな箱を掲げた。

「金井ひなたという女の子に会ったら、これを渡してほしい」

そう望月先生に言われたことを思い出しながら。フタを空ける。すると中には銀の指輪が入っていた。

「お守りなんだ。これをはめて、強く祈ると願いが叶う。本当は今日の別れ際に渡すつもりだったんだけど……代わりに届けてほしいんだ」

箱を閉じ、胸の上に置く。手の中には、指輪が握られていた。左手を伸ばし、薬指にはめてみる。そして箱にその手を重ね、彼女は祈った。

（優しい望月先生に、また会えますように……）

目を閉じ、その姿を思い浮かべる。まさにこの部屋で、勉強を教えてくれたときのことを。

「よーし、全問正解だ！　一週間前の内容も、ちゃんと覚えていたね。素晴らしい！」

そうして、拍手と共に柔らかい笑顔を向けてくれた。

「この単元は少し難しく感じるかもしれない。けどコツさえ掴めば、君ならすぐにできるさ。説明をよく聞いていてね？　……ほら。私じゃなくて、プリントのここを見てごらん」

そうして、真剣な表情で解説をしてくれた。

「先生って、よくコーヒーの匂いがしますね」

「バレた？　そう、よく飲むんだ。始めは眠らないためだったんだけど、今は味も好きなんだ。豆を自分で挽いて、淹れるときもあるよ」

「寝ないため？」

「……ええと、勉強や研究が忙しくてさ。頭を使うから砂糖は多めなんだ。フフ、君にも飲ませてあげたいな。君のはミルクもたっぷりで」

そうして、照れ臭そうに微笑んでいた。けれど目を開ければ、窓から吹きこむ風でカーテンが揺れるだけ。

「やっぱり、そうだよね……。何も起こるわけない。遠くに行っても気持ちがつながっていればって……。なのに敵同士じゃ、絶対に無理だよぉ。せめて、せめて好きって伝えたかったぁ」

涙がボロボロ零れ出す。彼女は夕日くらい目を真っ赤にして泣きじゃくり、いつしか疲れて眠ってしまったのだった。――扉をノックする音が聞こえ、おぼろげに意識を取り戻す。

「ひなたちゃん？　あれ、寝ちゃってるのかな。入るよー？」

愛しい声と共に扉がギイと鳴り、誰かが入ってきた。枕元のそばまでやってきた気配がする。まぶたの裏はまだ暗い。けれどひなたはそれを開いた。ぼやけた輪郭に、焦点を合わせる。すると望月先生が宵闇のなかで微笑んでいた。

「先生。望月先生……」

寝ぼけまなこで呟く。途端、ひなたは跳ね起きた。そこにいたのは、ヘイトムーン。開いた窓から射し込む月明かりに照らされ、顔の半分に影が落ちている。ひなたはベッド端まで後ずさった。

「どっ、どうして、あなたがここに！」

ムーンは黙ったまま、ベッドに乗り上げてきた。黒豹のように四つん這いでひなたへと迫ってくるので、彼女は縮み上がって丸くなり、箱を握りしめる。甘く華美な花、彼女がつける香水の匂いをひなたは初めて嗅いだ気がした。

「あなたのおかげよ。ありがとう、その指輪をはめてくれて。だからここまでたどり着けた。にしても左手の薬指なんて、意味を分かっているのかしら？　ねえ、こちらを向いて」

ムーンの手がひなたの頬に触れる。柔らかい絹の手袋、その質感が心地よい。その手で顔の輪郭を撫で、顎に添えた。ムーンは穏やかに微笑み、目を閉じる。その表情に、ひなたは釘づけになった。彼女の肌は真っ白で、現実感のない幽霊のよう。そのせいで、まだ夢を見ているのかとひなたは錯覚しかけた。そうしているうちに、見る見るうちに顔が近づいてきて――。

「ダメッ！」

ひなたはムーンを突き飛ばしていた。汗はダラダラで、緊張からか息が荒くなっている。

（チューはまだダメ！　だってあたし、まだちゃんと気持ちを伝えていない！）

ベッドから滑り落ちたムーンは、憂いを帯びた目をして、ドレスの裾についたほこりを払う。と同時に、彼女が肩から下げていたストールが、まるで生き物のごとく蠢いた。

「そう。手荒な真似は、したくなかったのだけれど」

危機を感じ、ひなたは部屋を飛び出した。開

きっぱなしだった、二階の窓から――。体が宙に浮く。足元には何もない。けれど彼女はひるまない。閑静な住宅街に閃光が走る。一瞬だけ辺りを真昼のように明るくして、ひなたはラブリーサニーとなった。しかし、その体を黒い腕のような何かが掴む。

「きゃあっ！　何っ!?」

腰をふくらはぎをそして首を、窓から次々と生えてきたそれに、絡めとられ、サニーは振り返った。窓際にムーンが立っている。満月が照らす部屋に引き戻されると、ムーンの足元から闇が広がり出す。それは部屋全体をすっぽり包み切ってしまう。サニーは数少ないが動く目を虚空に走らせ、叫んだ。

「あ、あたしを、どうするつもり!?」

ムーンはゆっくりとサニーを横たえさせる。

「洗脳するのよ。私の部下にするために」

次いで彼女は腰を下ろし、さりげなくドレスの裾を整えた。深いスリットから、お姉さん座りをする白い脚が覗く。

「どうして、ヘイト団の幹部なのに、あたしのところに家庭教師に来たんですか!?」

「敵情視察のためよ。けれどプリンセスたちは手ごわいから、近づくために姿を変えたの。あなた好みの王子様に」

サニーの目が潤む。泣きそうな声で訊ねた。

「じゃあ、指輪も分かって渡したの……!?」

「ええ」

ムーンは右手につけた手袋の先を噛み、するりと外した。すると薬指に銀の指輪が。

「ねえ、先生に教えて？」

変わらぬ優しいまなざしは、かざされた手のひらで覆い隠されてしまう。呼応するように、お互いの指輪から瘴気が噴き出した。すると見る見るうちにサニーの瞳が光を失う。

「あの指輪をはめたということは、何か願いがあったはず。それを私が叶えてあげるわ。だから一緒に来てほしいの」

頭を撫でるように、あるいは振り子を揺らすように、ムーンはかざした手をゆらゆらと動かす。サニーはそれを目で追い、とろんとした夢見るような表情を浮かべ、答えた。

「大好きな人がいるんです。でも絶対に結ばれない相手……。だけど想いを伝えて、結ばれて、愛されたいんです」

「いいわ。代わりに私があなたを愛してあげる」

「いません、代わりなんて」

はっきりとした口調に、ムーンの手がたじろぐように握りしめられた。それでも陰りつつある太陽は言う、光のようなまっすぐさで。

「どれだけ遠くに行っても、姿が変わっても、大好きです。あたしに、キスを。初めてなんです。だから……大切な人と……」

＊＊＊

「すごいよ、ひなちゃん！　満点なんて！」

「えへへ～」と照れ臭そうに、ひなたはテスト用紙を見せびらかす。それにはしゃいでいるのは、ふわふわなピンク色の癖毛をしたクラスメイト、三森わたほだ。

「わたちゃんが応援してくれたおかげ！」

「最近、お勉強すっごくがんばってたもんね。望月先生と一緒に！　留学がなくなってよかったね」

「ホームステイ先のトラブル様々だよ！」

「でも補習仲間がいなくなって寂しい。次からはひなちゃんにも教えてもらおっかなぁ？」

わたほは机に顎を乗せ、気だるそうにした。二人がつけた腕時計の音が鳴り響く。わたほが愚痴を零した。

「またぁ～？　最近、ヘイト団の動きが前より活発になってなぁい？　誰が暴れてるんだろう。ヘイトムーンだったら嫌だな。ヘイターが妙に連携してくるから」

唇を尖らせるわたほに、ひなたは苦笑いした。しかし、そうして緩んでいられるのもそこまでだった。アラートが次々と入って、どんどん増えていく。「大変！　行こう！」と言うわたほに、ひなたは目を合わせて強く頷くのだった。

大型ショッピングモールの吹き抜け、その一階のエントランスにヘイトムーンは佇んでいた。相対するのは、三人のプリンセスたち。その周りには、すでに大人しくなったヘイターが積まれていた。ピンク髪のリーダー、ラブリークラウディーは叫ぶ。

「みんな！　ブリリアントライトで、ムーンを止めよう！」

「うん！」と、サニーと青髪のレイニーが声を揃えた。三人が横並びになって、ステッキを重

ねると、杖の先端に光が溜まっていく。十二分な力を宿したその杖を、少女たちは掲げた。
「ブリリアントライト！」――クラウディーがそう言い放とうとした矢先だった。サニーが杖でレイニーの手首を打ち据え、ステッキをはたき落とす。力が散らばるなか、なんとかその光はムーンに届いた。しかし彼女は扇で煽がれるように涼しげな笑みを浮かべる。
「あら？　随分と優しいのね」
その隙に、サニーはレイニーに黒い腕輪をつけていた。そこから瘴気が溢れ出す。「あ……」と小さな声を漏らしたかと思うと、レイニーは力を失い、膝をついた。糸の切れた操り人形のように首が傾く。クラウディーは一瞬の間に起こったできごとに動揺し、口走った。
「サニー、どうして!?」
「あたしね、大好きな人がいるの。クラウディーなら、あたしの恋……応援してくれるよね？」
彼女の目は澱んでいた。にもかかわらず、妙にイキイキしている。クラウディーはオロオロして、意味を成さないうめき声を零すばかり。
「二人とも、こちらへ来なさい」
サニーはスキップするような軽やかさでムーンの元へと駆け寄った。一方、レイニーは悪夢でも見ているようなのろのろとした動きで、彼女に近づいていく。その前でレイニーがかしずくと、サニーはムーンの右腕にくっついた。彼女がうっとりとムーンを見上げるさまを見て、クラウディーは、やっと頭に血が巡ったのか肩を怒らせ、悲鳴を上げる。
「レイニー、目を覚まして！　サニーも！」
「違うわ」
ムーンはぴしゃりと言った。
「彼女はもう、ラブリーサニーではないの。さあ、見せてあげなさい」
サニーが闇に輝く。胸のブローチにひびが入り、衣装の一部がはじけ飛んだ。同時に髪飾りも破裂した。ほどけたブロンドヘアは毛先から夜空のごとくなり、それを再び新たな髪飾りがまとめ直す。黄金色の装束は見る影もなく、黒く染まり、割れたブローチすらも侵して。
「紹介してあげるわ。彼女はヘイト団の新たな仲間――」

＊＊＊

「ヘイトエクリプスと申します」
ラブリーサニー改め、ヘイトエクリプスはスカートの裾を摘まんで広げ、団長へとお辞儀した。その姿に彼は破願する。
「うむうむ。良き仕事だ、ムーンよ。この死んだ魚のような目、黒き装束。おや、この羽根飾りは？　お前の帽子のと同じではないのか？」
「はい。彼女が選びました」
納得したように頷くと、彼は眼光鋭い真剣な面持ちになった。
「して、残りのプリンセスたちは？」
ムーンは楽しげに顛末を告げる。――ラブリークラウディーは、前に進めずにいた。すぐそこには、仲間たちを奪って従えた魔女が立っているというのに。先ほどまで協力するために重ねていたステッキは、今や敵対のために重ねられる。甲高い金属音を響かせながら、クラウディーとエクリプスはモールのエントランスで鍔迫り合いを繰り広げた。
「止めてよ、サニー！　わたしたちは仲間、争っている場合じゃないの。ムーンを大人しくさせて、買い物しにきたお客さんを助けないと」
「どうでもいい。あたしはムーン様の役に立てればそれでいいんだから」
合いの手を挟むように、ヘイターが襲いかかってくる。だからといって、そちらに気を取られるとエクリプスの猛攻に押されてしまう。ジリ貧のクラウディーは帽子の下で妖しく微笑むムーンを睨み、エクリプスへと叫んだ。
「あなたもプリンセスでしょ!?　みんなに愛されて、代わりにみんなを愛する。それがわたしたち！　明るくてまっすぐなサニーに戻ってよぉ！」
エクリプスは子どもっぽくムッとする。
「あたし、何も変わってない。まっすぐに、ムーン様を見つめているだけ。ムーン様だけを照らすの」
「先生はどうするの!?　ヘイト団にいたら、もう会えないんだよ？」
「ううん。ずっと、ずっと一緒。だってそう約束してもらったんだもん」
エクリプスはどこかだらしなく、惚気話をするような笑顔を零した。クラウディーはキョトンとした表情を浮かべる。

「仕事は済んだわ。カインドハートも豊作ね。そろそろ私たちはお暇させていただこうかしら。もちろん、レイニーも一緒に」
　ムーンの声が響き、エクリプスが引く。同時に、ショッピングモールのあちらこちらから、ヘイターがわらわら集まってきた。今度は、ヘイターのせいでクラウディーは進めなくなる。
「ダメよ！　待って！　二人を、返してっ！」
　けれど声は届けども、悪意の壁はあまりに厚い。ヘイターとの争いに飲まれかけているクラウディーへと、ムーンは新月のような真っ黒な笑顔を向ける。
「ご機嫌よう。フフフ、あなたは絶望に目を曇らせるといいわ。一人きりでね」
　しばらくかかったが、ついにヘイターたちを制し、クラウディーはムーンがいた場所へと駆けつけた。喧騒は止み、争いも終わりを迎えている。けれど、そこにはもう何もない。彼女は膝から崩れ落ちた。ステッキを握りしめて、俯いて、その拳で顔を覆い、二人を呼ぶ。痛ましい声が吹き抜けにこだまするも、返事はない。
「ううっ……。わたしたち、仲良しだったのに」
　顔は曇り切って、今にも雨が降りそうだ。……しかしてそのまなこには、稲妻が駆け巡っている。彼女は奥歯を噛みしめ、折りそうなほど杖を強く握った。
「許さない。特にレイニーを売った、裏切り者のサニーは……！」
　――その報告に、メテオは再び、そしてますます笑顔になった。ムーンは続ける。
「ラブリーレイニーはただいま、より強固に洗脳中です。しかし難航しております。エクリプスのときは、すんなり完了したのですが……。もうしばらくお時間いただければ」
　メテオはエクリプスの胸についたブローチをジッと見つめた。以前は黄色い光を放っていた宝石は粉々に砕けていた。ただし、真っ黒に染まったのは片半分だけ。
「まあ、そうだろうな。彼女が易々と我が傘下に収まるとは思えん。次なる計画の出来は、お前の研究にかかっておるのだ。心してかかるがよい。……さて、ヘイトエクリプスよ」
「はい」と物静かな返事をした彼女へと、メテオは訊ねた。
「ムーンとは、どのように過ごしておるのだ？」
「主に助手として仕事を手伝っております。共に偵察や次の収集先への下見に行ったり、会議をしたり……。ムーン様はコーヒーをお淹れになるのがとても上手で、そちらも勉強させていただいているところです。とてもお優しくて……もったいないくらいの良きご主人様にございます」
　エクリプスのお墨付きに、メテオは「そうかそうか」と、好々爺のように笑った。そして彼は咳払いをし、指でムーンを呼び寄せた。彼女が耳を傾けると、ひそひそと話しかける。
「で、どうなんだ？　関係は進展したのか？」
　ムーンは飛び跳ね、口元を手で隠しつつ小声で返した。
「すっ、するわけないでしょう!?」
「チューまでしたというのに」
「していません！　するとしても洗脳の手段としてです！　彼女にとっての私は、その……」
　ムーンの脳裏には、突き飛ばされたときに垣間見たひなたの怯えた顔が浮かんだ。そして悲しそうに呟く。
「あくまで、ご主人様ですから……」
「なんだ、しとらんのか。せっかく洗脳して好きにできるというのに。つまらん」
「それは致しかねます。私にとって、彼女は」
　躊躇いを滲ませ、ムーンは囁いた。
「……眩しすぎるのです」
　冷たく、ただ白いだけだった頬が、ほんのり紅に染まっている。その顔料は恥じらいから作られたものだろうか。メテオは不満げに唸った。
「ううむ……。それに、お前が偵察やら会議やら言っているそれ、デートだとちゃんと伝えた方がよいのではないか？」
「おっ、お心遣い感謝いたします。ですが！」
　先ほどまでの妖艶さはどこへやら。彼女は声を荒らげ、断固として言い放つ。
「余計なお世話です！　報告は済みました、失礼いたします！　……参りましょう」
「はい、ムーン様」
　憤慨を脇にどけ、ムーンがエスコートするように右腕を差し出す。すると、エクリプスはそれにくっついた。腕を組み、足並み合わせて立ち去っていく。……そんな二人の背中を見守りつつ、メテオは思った。
（早く、くっつかんかなぁ……）

だいぞう

魔法少女の悪堕ちに関する調査　報告書

文責：緋風

本報告書は、2022年8月5日から10月31日までGoogleフォームを用いてインターネット上で行われた「魔法少女の悪堕ちに関する調査」というアンケート調査の回答結果を集計したものです。
今回の調査では最終的に232件の回答を得ました。

今回のアンケートは大きく5つのパートに分かれています。
①魔法少女の悪堕ち：設問1～9（選択式・必須）
②悪堕ち全般：設問10～14（選択式・必須）
③TS魔法少女の悪堕ち：設問15（選択式・必須）
④魔法少女および悪堕ち魔法少女について：設問16～19（記述式・任意）
⑤回答者の性別および年齢：設問20, 21（任意）

以下、今回設置した全ての設問を本ページに一覧で、次のページから結果を掲載します。

設問10　あなたが好きな悪堕ちは？
A 間接支配系悪堕ち（洗脳や改造など）
B 直接支配系悪堕ち（憑依や同化など）
C 覚醒・分岐系悪堕ち（覚醒や人格変更など）
D 暴走悪堕ち
E 他者の干渉はあるが最終的に堕ちること選ぶのが自分である悪堕ち
F 他者の干渉もほぼなく最終的に堕ちること選ぶのが自分である悪堕ち

設問11　あなたが悪堕ちに求めるのは？
A 堕ちた後の姿を重視
B 堕ちる過程を重視
C 過程と堕ちた後の姿の両方を求める
D 堕ち前後と堕ちる過程の全てを求める

設問12　あなたは悪堕ちに対してどの視点を重要視しますか？
A 堕ちていく対象者の視点
B 対象者を堕とす者の視点
C 対象者でも堕とす者でもない第三者の視点

設問13　悪堕ちに性的要素は必要ですか？
A あった方がいい
B なくてもいい
C ない方がいい
D わからない

設問14　悪堕ちとは救済だと思いますか？
救済：悪堕ちさせることで運命改変を行って存命させたり、
真面目過ぎて押しつぶされそうな子を責任感から解放させるなど。
A はい
B いいえ
C わからない

設問15　TS魔法少女の悪堕ちといえば？
TS：何らかの原因により性別が変わること。
この場合は魔法少女であるため男性から女性へと変わる。
A TS少女が魔法少女に変身する・悪堕ち後も少女のまま
B TS少女が魔法少女に変身する・悪堕ち後は性別を自由に入れ替えられる
C 普段は男性だが変身時に少女になる・悪堕ち後も少女のまま
D 普段は男性だが変身時に少女になる・悪堕ち後は性別を自由に入れ替えられる

設問16　好きな魔法少女を1人答えてください。
任意回答・自由記述

設問17　悪堕ち魔法少女の中で好きな魔法少女を1人答えてください。
任意回答・自由記述

設問18　悪堕ちさせたい魔法少女を1人答えてください。
これまで悪堕ちしていない、かつ最初から悪側ではない魔法少女に限ります。
任意回答・自由記述

設問19　一番最初に出会った悪堕ち魔法少女を教えてください。
任意回答・自由記述

設問20　あなたの性別を教えてください
任意回答
A 男性
B 女性
C その他

設問21　あなたの年齢を教えてください
任意回答・整数のみ

設問1　あなたが思う魔法少女のイメージに一番近いのはどれですか？
A 魔法少女とは属性である（使命を持たず自由に生きている）
B 魔法少女とは困っている人々を助けるもの
C 魔法少女とは他者に請われて悪の勢力と戦うもの
D 魔法少女とは自分の願いを叶えるために戦わなければいけないもの
E 魔法少女とは自分の願いを叶えた代償として戦わなければいけないもの
F 魔法少女とは人々に害をもたらす「魔女」の幼い姿

設問2　あなたが思う魔法少女の魔法の力の源はなんですか？
A 本人が持っている特殊な力（魔力）
B 悪の勢力と戦うために他者から身体に付与されたもの
C 悪の勢力と戦うために他者から与えられた変身デバイスから供給されるもの
D 「魂」や「血」など本人の身体に内在するが消費されていくもの
E 愛と勇気と絆
F 魔法ではなく魔術と考えている（燃料を用意すれば誰にでも発動できるもの）

設問3　魔法少女にお供（マスコットキャラクター）は必要だと思いますか？
A いなくてもいい
B いた方がいい
C いた方がいいが魔法少女を騙す奴はいらない

設問4　「悪堕ち魔法少女」と聞いて思い浮かべるのは？
A 作中の魔法少女が敵の手に掛かって悪堕ちする
B 作中の魔法少女が自らの選択で悪堕ちする
C 既に悪堕ちしている魔法少女が敵として現れる

設問5　魔法少女が悪堕ちして大人の姿になるのは好きですか？
A はい
B いいえ
C わからない

設問6　主人公の魔法少女が悪堕ちするのは許せますか？
A はい
B いいえ
C わからない

設問7　悪堕ちした魔法少女はその後どうなって欲しいですか？
A 元に戻る・戻った後も幸せに暮らす大団円
B 元に戻る・戻った後は贖罪に尽くす
C 元に戻る・戻った後はかつての悪事を非難されながらひっそり生きる
D 悪堕ちしたまま・平和になった世界に馴染めずに生きる
E 悪堕ちしたまま・他者に断罪されて死亡する
F 悪堕ちしたまま・自滅も含め何らかの原因で死亡する
G 悪堕ちしたまま・悪の勢力が世界を征服して終わる
H 悪堕ちしたまま・自らが悪の首領となって終わる

設問8　もし仮に悪堕ち魔法少女が元に戻る場合、
悪堕ちしていたときの力を引き続き使えるのは好きですか？
A はい
B いいえ
C わからない

設問9　もし仮に悪堕ち魔法少女が元に戻る場合、
悪堕ちしていたときの影響が残るのは好きですか？
※いわゆる「堕ち名残」のこと
A はい
B いいえ
C わからない

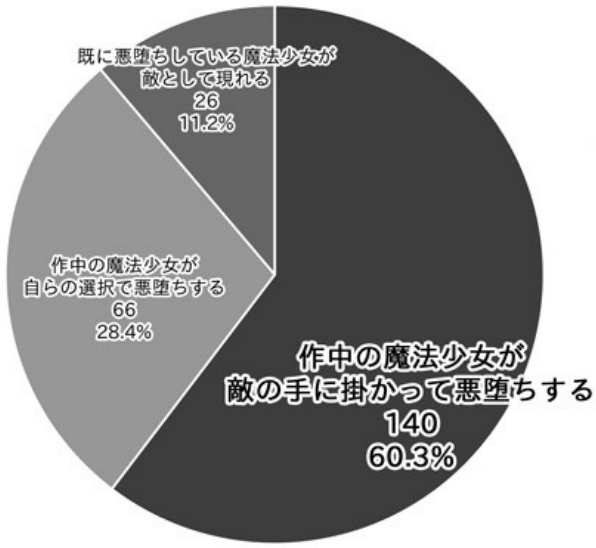

図4　設問4「悪堕ち魔法少女」と聞いて思い浮かべるのは？

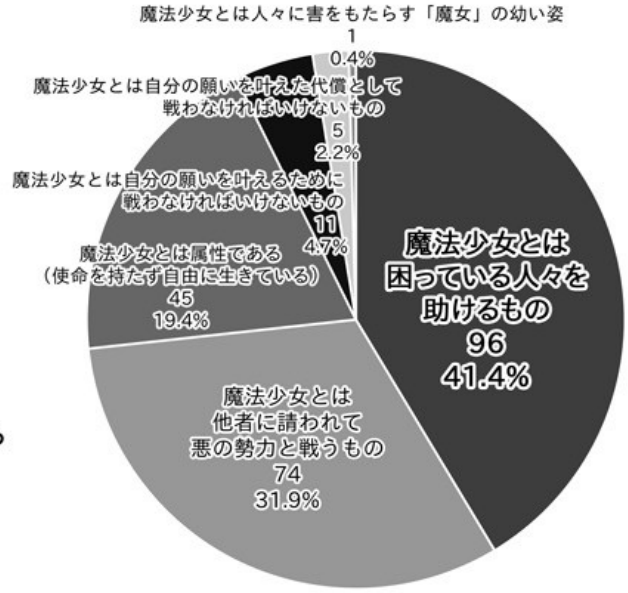

図1　設問1 あなたが思う魔法少女のイメージに一番近いのはどれですか？

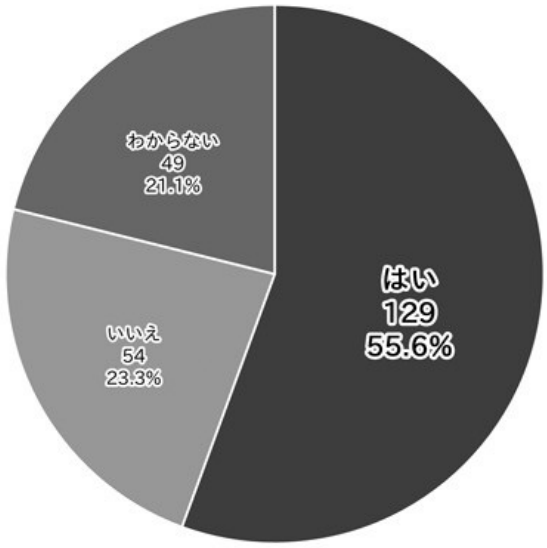

図5　設問5 魔法少女が悪堕ちして大人の姿になるのは好きですか？

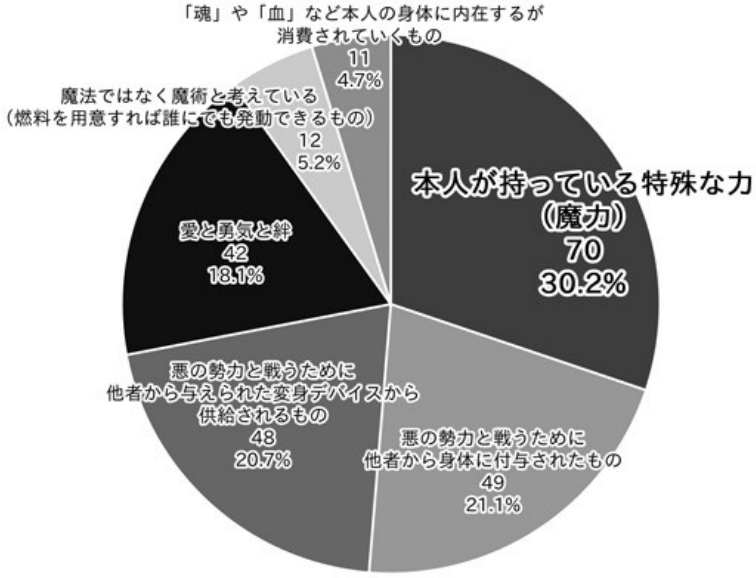

図2　設問2 あなたが思う魔法少女の魔法の力の源はなんですか？

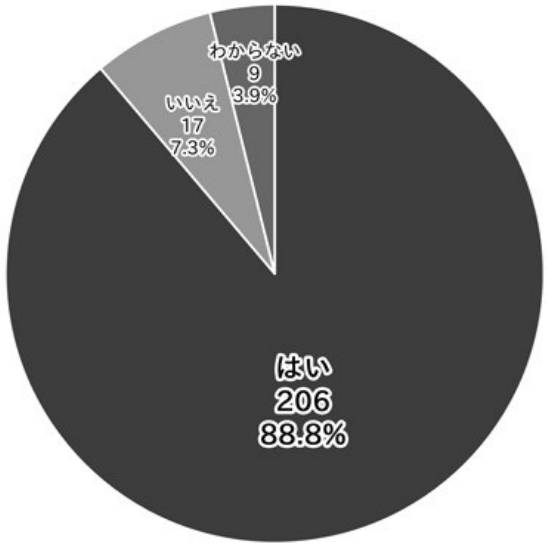

図6　設問6 主人公の魔法少女が悪堕ちするのは許せますか？

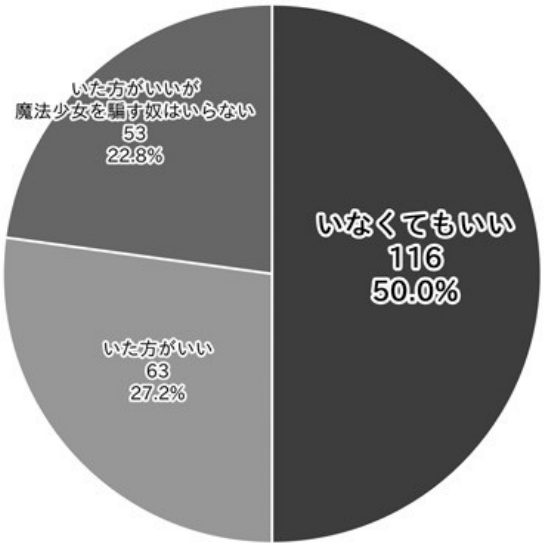

図3　設問3 魔法少女にお供（マスコットキャラクター）は必要だと思いますか？

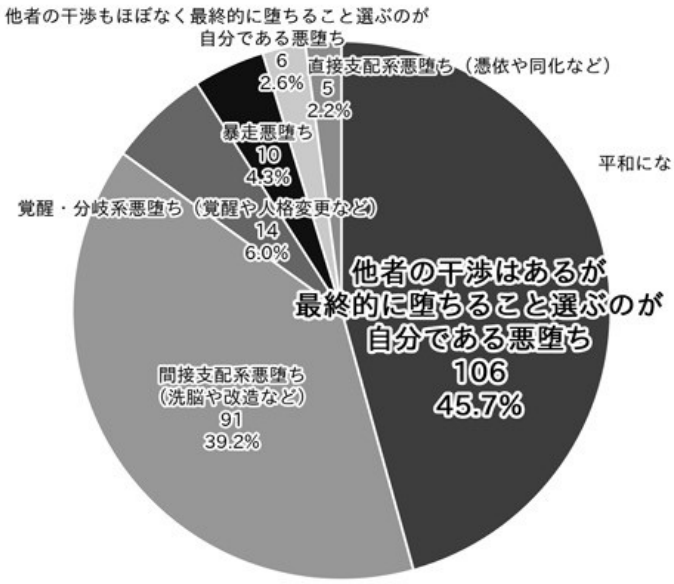

図10　設問10 あなたが好きな悪堕ちは？

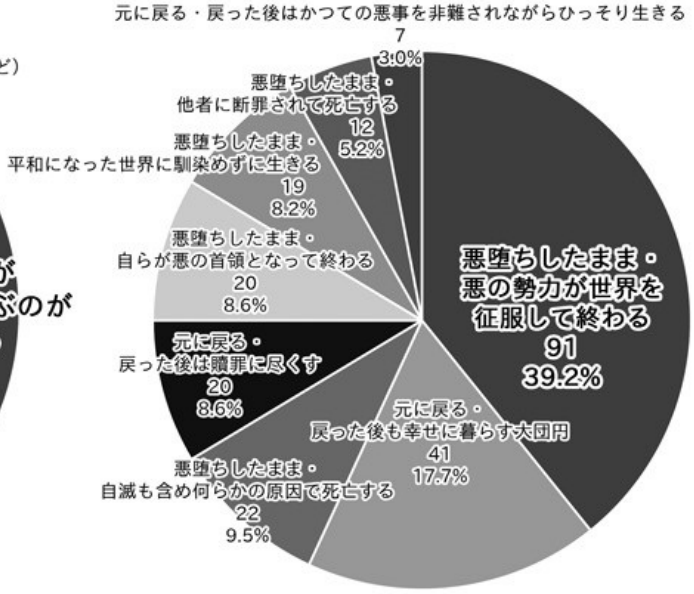

図7　設問7 悪堕ちした魔法少女はその後どうなって欲しいですか？

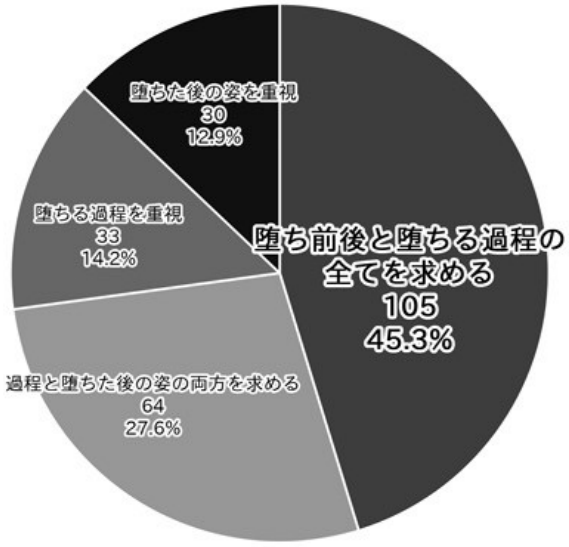

図11　設問11 あなたが悪堕ちに求めるのは？

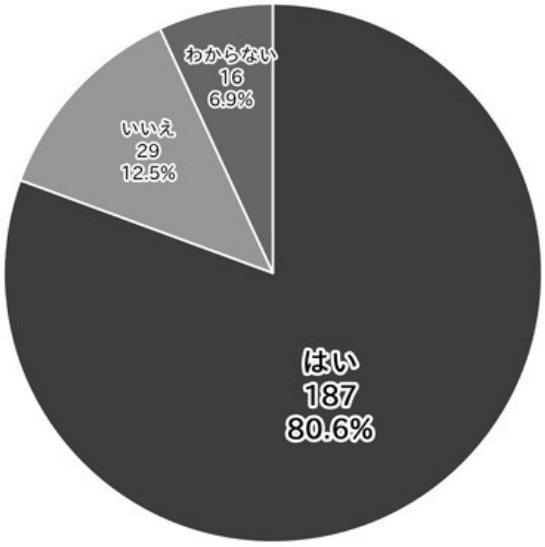

図8　設問8 もし仮に悪堕ち魔法少女が元に戻る場合、
悪堕ちしていたときの力を引き続き使えるのは好きですか？

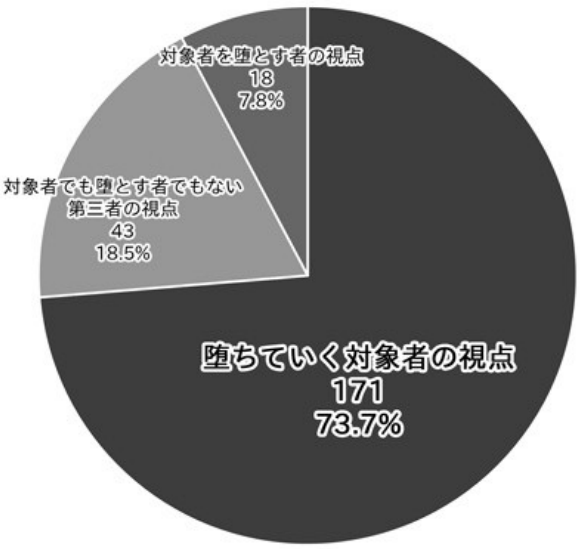

図12　設問12 あなたは悪堕ちに対してどの視点を重要視しますか？

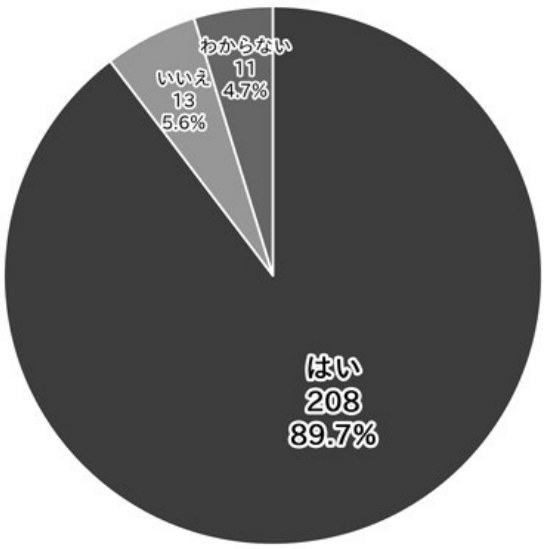

図9　設問9 もし仮に悪堕ち魔法少女が元に戻る場合、
悪堕ちしていたときの影響が残るのは好きですか？

設問 16 好きな魔法少女を１人答えてください。

有効回答数：98

1位	高町なのは （魔法少女リリカルなのはシリーズ）	12 票
2位	暁美ほむら （魔法少女まどか☆マギカシリーズ）	7 票
3位	美樹さやか （魔法少女まどか☆マギカシリーズ）	6 票
4位	フェイト・テスタロッサ （魔法少女リリカルなのはシリーズ） 鹿目まどか （魔法少女まどか☆マギカシリーズ） 佐倉杏子 （魔法少女まどか☆マギカシリーズ）	5 票

設問 17
悪堕ち魔法少女の中で好きな魔法少女を１人答えてください。

有効回答数：85

1位	暁美ほむら （劇場版 魔法少女まどか☆マギカ [新編]叛逆の物語）	13 票
2位	サキュメアラピス （愛聖天使ラブメアリー）	9 票
3位	ブラックレディ （美少女戦士セーラームーン）	6 票
4位	エビルハルナ （コレクター・ユイ）	4 票
5位	スレイブチェリー （TS 魔法少女なお!） 美樹さやか （魔法少女まどか☆マギカ）	3 票

設問 18 悪堕ちさせたい魔法少女を１人答えてください。

これまで悪堕ちしていない、かつ最初から悪側ではない魔法少女に限ります。

有効回答数：70

1位	高町なのは （魔法少女リリカルなのはシリーズ）	8 票
2位	天城なお （TS 魔法少女なお!）	7 票
3位	木之本桜 （カードキャプターさくら）	6 票
4位	鹿目まどか （魔法少女まどか☆マギカ）	4 票
5位	イリヤスフィール・フォン・アインツベルン （Fate シリーズ） セーラームーン （美少女戦士セーラームーンシリーズ） コレクター・ユイ （コレクター・ユイ） キキ （魔女の宅急便） 八神はやて （魔法少女リリカルなのはシリーズ）	2 票

設問 19 一番最初に出会った悪堕ち魔法少女を教えてください。

有効回答数：75

1位	ブラックレディ （美少女戦士セーラームーン）	16 票
2位	エビルハルナ （コレクター・ユイ） ダークマーキュリー （実写ドラマ版 美少女戦士セーラームーン） 美樹さやか （魔法少女まどか☆マギカ）	4 票
5位	ピクシィミサ （魔法少女プリティサミー）	3 票

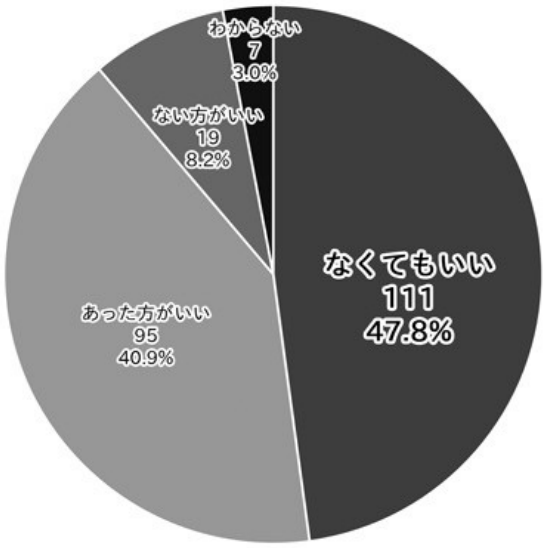

図13　設問13 悪堕ちに性的要素は必要ですか？

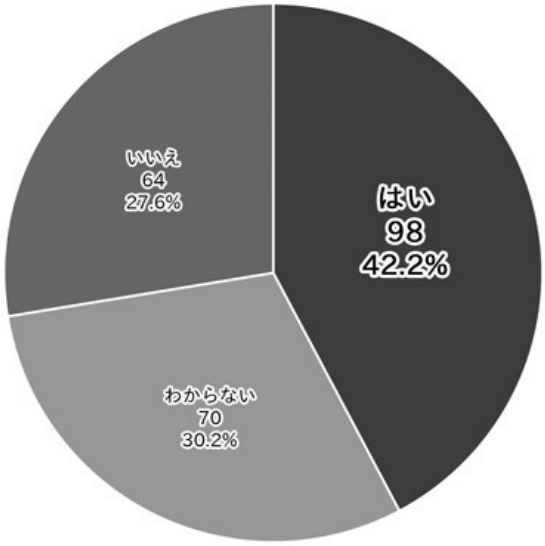

図14　設問14 悪堕ちとは救済だと思いますか？

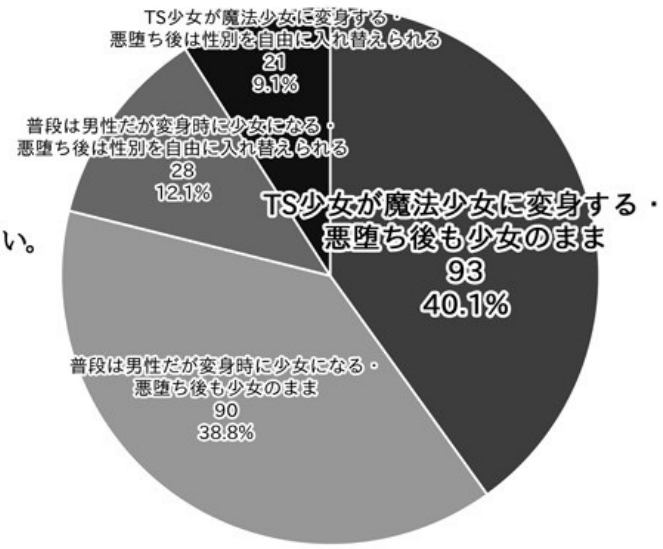

図15　設問15 TS魔法少女の悪堕ちといえば？

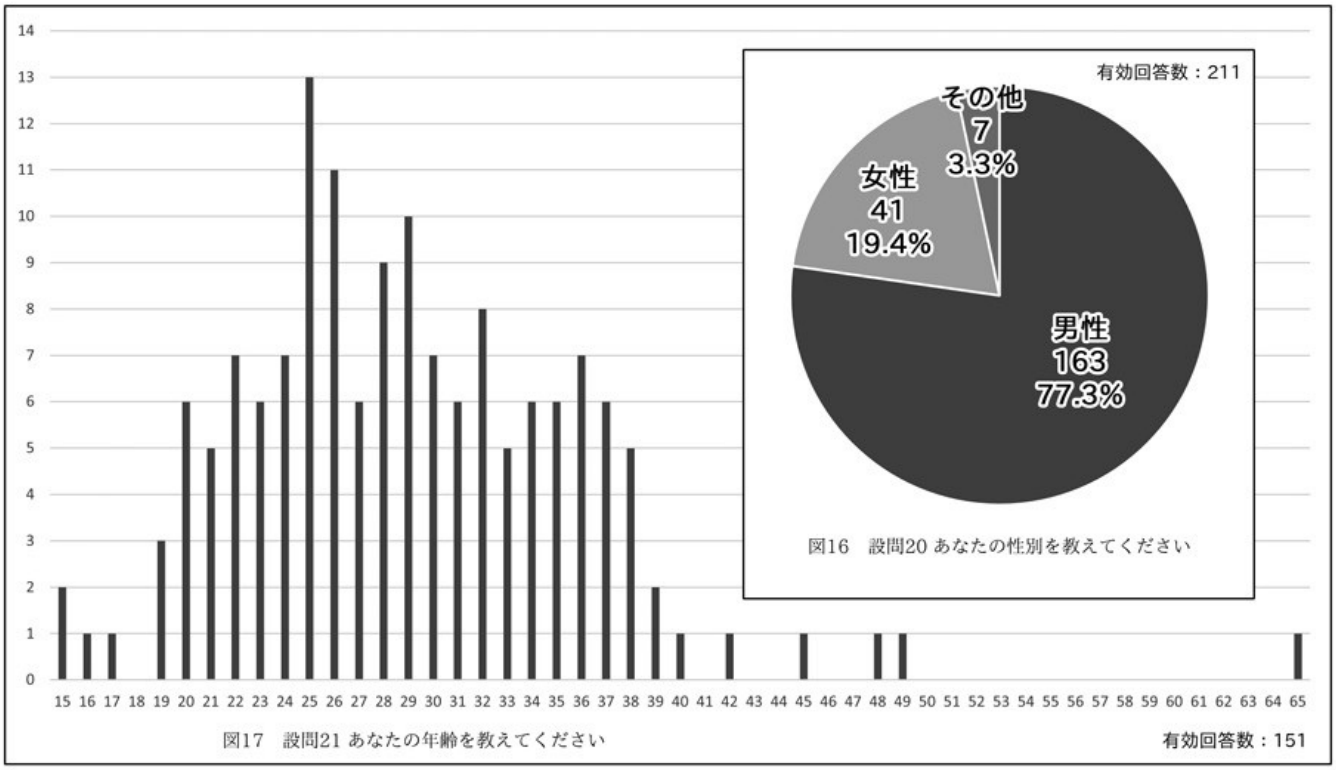

図16　設問20 あなたの性別を教えてください

図17　設問21 あなたの年齢を教えてください

報告書の最後に、前回２０２０年実施の調査結果との比較について簡単な考察を記したい。前回はテーマに縛りのない悪堕ち全般の調査であり、要望などのコメントも受け付けていた。対して、今回は魔法少女をテーマに掲げた調査であり、コメントも受け付けていないなど、細部で調査内容は異なっている。

実は設問10と設問11は似たようなことを前回も聞いていた。図18が前回の好きな悪堕ち、図19が悪堕ちに求めるものだ。今回の調査では「好きな悪堕ち」に関しては同種の項目をまとめ、選択しやすいように前回から構成を変えた。

まず図19の「悪堕ちに求めるもの」に関しては前回の調査結果とほとんど変わらない結果が得られた。対して「好きな悪堕ち」に関しては、前回は洗脳単体が圧倒的に多かったのに対して、今回は闇堕ちが多くなっている。それ以下の項目の順位の違いについても興味深い。

前回と今回では回答数に6倍近い開きがある。前回のアンケート設置期間は約4ヶ月、今回は約3ヶ月と差はあるものの回答数の伸び方からすると期間の差は支配的ではない。前回は悪堕ち全般に興味がある人が回答したのに対し、今回はその中で魔法少女にも興味がある人が回答していることで回答数に開きがあると考えるのが妥当であろう。その仮説に基づけば、魔法少女の悪堕ちに興味がある人が好きな悪堕ちは、洗脳よりは闇堕ちの方であるということになり、これは２０１０年代の魔法少女たちの物語と相関があるように考えられる。

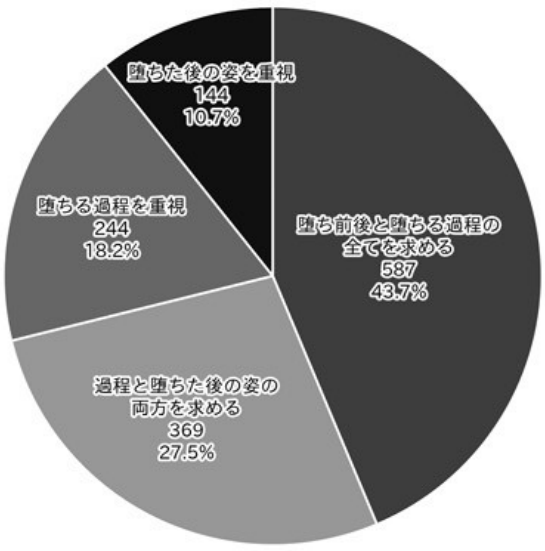

図19　悪堕ちに求めるもの（2020年実施）

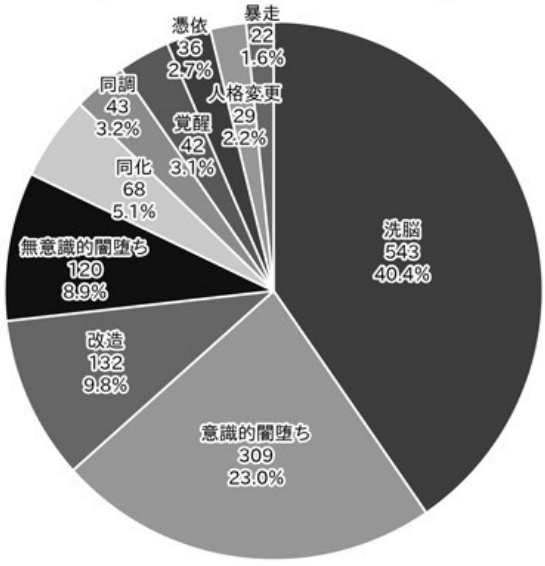

図18　好きな悪堕ち（2020年実施）

あとがき

暮さくれ

「魔法少女×悪堕ち×女幹部との百合」をコンパクトにまとめつつ「男の子ってこういうのが好きなんでしょ？」を全載せしました！脇役である、格の高い純愛厨の首領と（実は）ヤンデレなピンク魔法少女も必見です。

今回は**だいぞう**様に素敵な挿絵を描いていただきました！（主催より）

なまはぐれ

こんにちは。なまはぐれと申します。
今回も以前参加したときと同じイラストのみで文字なしで参加しましたが
いいキャラを作れたと個人的には満足しています。
次に参加するときは複数ページ申請も挑戦してみたいです。

ナメクジ次郎

魔法少女悪堕ち合同発行おめでとうございます。
悪堕ち沼に本格的に入ったのはフォロワー様の魔法少女悪堕ちモノに多大な影響を受けたからなので、今回の合同で魔法少女の悪堕ちを書けたことはとても嬉しく思います。

Twitter　@ookimomota

&

ふっとら

友を想いあえて闇の力に手を染める悪堕ち魔法少女いいですよね…その一途さがたまりません。かつて戦った悪の親玉の力を取り込んだ変身フォームということで、大変テンションが上がり楽しく描かせて頂きました。

星空カナタ

普段は「小説家になろう」の片隅にて活動しているしがない物書きですが、悪堕ち合同に参加することになった悪堕ち初心者です。
ツイッターでは人の事を「闇だ」の「邪悪だ」の「光属性の文字書きは無理があろう」などと宣う輩が多数見られますが、本作品をもって私が邪悪ではなく光属性の亜種たる“星空属性”だと証明できたと自負しております(｀・ω・´)ｷﾘｯ

&

家畜

表紙の眼鏡っ娘は三瓶花琳（みへい・かりん）16歳
現代日本の高校１年生。５人組魔法少女グループの一人です。
正義の魔法少女として活躍し、最年長としてみんなを守る頼れるお姉さん的存在……
ですが、実は既に悪の組織の手にかかり魔法少女たちの情報を秘密裏に流しつつ、
自分の怪しげな研究に没頭している……というキャラです。
表紙の絵は学校地下室を勝手に改造して自身のホムンクルスを作っている所。

離宮

悪堕ちファンブック2Bぶりに参加させていただきました、離宮です。
今回はせみいつさんとタッグを組んで、コラボで作品展開している花聖騎士の子達での湿度高めな悪堕ちをやらせていただきました。
重い感情を拗らせて拗らせて、拗らせきって堕ちちゃう子、良いですよね……

&

せみいつ

はじめまして、私は、せみいつ。
初めての合同誌参加、貴重な経験をありがとうございました。
堕ちていく花聖騎士ちゃん、私の絵で楽しんでいただけたら嬉しいです…

本誌を手にとっていただき、誠にありがとうございます。
悪堕研究機構代表の緋風より御礼申し上げます。
初めての方も、以前より御贔屓の方も、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2021年5月の『悪堕ちファンブック』、2021年12月の『悪堕ちファンブック2A』『悪堕ちファンブック2B』、
そして2022年8月の『うちよそ悪堕ち合同誌』に続く4つ目の悪堕ち合同企画として今回の
魔法少女悪堕ち合同誌『魔法少女悪堕ち学』を企画し、無事このような形で合同誌を作成することができました。
※ちなみに『魔法少女悪堕ち学』はTwitterでのアンケートによって事前にタイトルが決まりました

今回は「魔法少女」がテーマということで、これまでの悪堕ちファンブックの3冊とは違い、
魔法少女のビジュアルの提示、具体的には小説で参加される場合は
魔法少女の悪堕ち前と悪堕ち後が分かる絵の提出を必須とする、難しい参加条件になっていました。
なにをもって魔法少女であるか、その定義は悪堕ちの定義よりも曖昧で難しいものです。
書いている作者は「これは魔法少女だ」という認識だけど、その説明がないために読者にはその姿が想像できない、
肝心の「この作品における魔法少女とはなにか」ということが分からないままであるのは、
言ってみれば魔法少女でなくても成立してしまう物語ともなってしまい、今回の合同誌の趣旨に反してしまいます。
そのため、魔法少女であることをまず視覚的に納得してもらうためのビジュアルの提示だったわけですね。

今回の表紙ですが、家畜様に「魔法少女悪堕ち」にちなんだ素敵なイラストを描いていただきました。
依頼を快く引き受けていただいた家畜様に厚く御礼を申し上げます。
※表紙イラストの設定に関しては家畜様のあとがきを御参照ください

さて、今回の冊子は、同時並行で実施していた魔法少女悪堕ちアンケートの結果も掲載しています。
同じように悪堕ちに関するアンケートは初回の『悪堕ちファンブック』でも実施していたのですが、
想定を上回る参加者数だったため冊子が分厚くなることを避け、電子版の別冊として配布しました。
今回は冊子内に掲載することができましたため、魔法少女の悪堕ちに関する聖典と呼べるような、
そんな、物理的に1冊の冊子である意義がある合同誌を作り上げることが叶いました。

最後になりますが、次回は少し大きな企画の実施に向けて準備を行っており、
合同誌企画としてはいったん今回で小休止とする予定です。
企画の内容に関しては賛否両論はあるかと思いますが、
悪堕研究機構としては引き続き「悪堕ち」と真摯に向き合える企画を提供し、
また、この世に悪堕ち作品が1つでも多く増えることを願っております。
それでは、次の企画で再び皆様にお会いできることを
心待ちにしております。

悪堕研究機構　代表　緋風

悪堕研究機構悪堕ち合同4
魔法少女悪堕ち合同誌
『魔法少女悪堕ち学』
（電子版）

発行日　2022年12月31日（冊子版）
　　2023年1月7日（電子版）
発行者　悪堕研究機構
編集者　緋風（悪堕研究機構）

悪堕研究機構
　代表　緋風
メール　akuochiorg@gmail.com
Twitter　@utakuochi
公式サイト　akuochi.com

本誌の無断での転載・複製を禁じます。
御連絡はメールアドレス宛にお願いします。

参加者一覧（敬称略）

暮さぐれ
なまはぐれ
ナメクジ次郎 & ふっとら
星空カナタ & 家畜
離宮 & せみいつ
緋風